
魔王の為の夜想曲

祭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の為の夜想曲

【Nコード】

N5683L

【作者名】

祭歌

【あらすじ】

一之瀬砂花、15歳。学校の屋上でゆうゆうと居眠りしていたが、子煩い鳥の声に目を開けると、ぐにやりと空間が歪み、気づけば異世界らしいところに来ていた。RPGなら間違いなく勇者のはずが…！？ なんちゃって異世界召還ファンタジー。お楽しみいただけたら幸いです。

魂揺

暗闇に光。

朧なそれは、徐々に明るさを増し、ついには闇に弾けた。
充滿する錆びた鉄のような匂いが、やにわに払われていく。
美しい、と彼は思った。

赤く染まった軀が、あますことなく洗われていくようだった。
手を伸ばす。

『?????』と音ならぬ声で彼は呼びかけた。

昂然と輝く光に乞うように呼びかけた。

それは波紋の如く広がり、揺らぎ、空間を鳴らしていく。

『?????????』

指先が溶ける。

空間は歪む。

闇は光に。

音ならぬ音が、響き渡る。

そして、全てが弾けた。

魂揺（後書き）

1 はじまりは鳥

不思議なことってというのは漫画か小説か映画の中だけのものだと
思っていた。

ちゅんちゅん、と鳥の鳴声がする。とろんとそれを聞きながら、
あたしは鬱陶しげに寝返りを打った。ふかりと自前の枕が沈む。

あー、うるさー。

風の気持ちいいこの屋上には、とにかく鳥が多い。そりゃあ多い。
超多い。めっちゃ多い。

イライラするほど多い。

暇さえあれば、ガアガアガアガア。ひとが気持ちよく寝こけてい
るっていうのに、とことん邪魔してきやがるのだ。くっそー、良い
スポットだと思ったのになあ。

そんなことを思いながら、あたしは堂々授業をサボっていた。

クリーム色のカーディガンみたいなおっきなボタンがついたセー
ターはあたしがごろごろ転がるたびにぐしゃぐしゃになって、おま
けに灰色のプリーツスカートは皺だらけになる。唯一、セーターの
下のシャツだけはもとから皺もくせもつきまくりなので気にならな
い。というかあんまり変わりがない。

ころん、と左耳からイヤフォンが外れた。転がって、飲み終わっ
た牛乳にぶち当たる。

ガア、とひととき大きく鳥が鳴いた。

あたしは舌打ちして。

ピイイ！と、小鳥が鳴いた。

????ツクン!

「……………????????いつ?」

ぐにやりと視界が歪む。??違う、空間、が。どろどろに、溶けていく。

なに、これ。

ぐわつと腹の底に熱湯を流し込まれたみたいに体が熱くて、気持ち悪い。吐き気がする。

目眩がする。

寝っ転がったまま、あたしは、強く頭を押さえた。ピィィ、と鳥が鳴く。これ、何の鳥の声だっけ。

????ツクン!

心臓が破裂するような音を立てた。耳鳴りが酷い。

首の後ろから枕が滑り抜ける。ごん、とどっかを打った。痛い。のに、意識はますます混濁する。

気持ち、悪い。

「う、え……………」

口元を押さえ、瞼をきつく閉じた瞬間。

全ての感覚が消え失せた。

1 はじまりは鳥（後書き）

お立ち寄りいただきありがとうございます。

お茶の間の一時でも、楽しんでいただけたら幸福です。

登場人物整理 1

いちのせ
一之瀬 砂花

高1 15歳

口癖は「マージーカー」
肝が据わってる。

2 迷子は必ず歩き出す

ど、どこだこじ。

吐きそうになつて急にぐるぐるし始めてうぎよあとか思つてたらいきなりなんかがぐにやつてなつて意識消えたと思つたらこのよくわかんないところに。

いた、ぼい。あたし。

ふさふさした草の上でしりもちをついていたあたしは、のっそりゆっくり立ち上がった。

ぼつぼつと生える雑草、天から囲うような木々。微かに聞こえる唸り声と、烏の鳴声。

重なり合つた枝の向こうは暗くてさっぱり景色がうかがえない。ぶつちやけ今あたしが立つてる場所も暗くて何があるのかいまいち分からない。感じ。うん。

「……マージカー」

完璧に、森だった。

*

どん！と乱暴に机を叩き、何やらわめき始めた男を睨んで、彼は不機嫌に頬杖をついた。

大量の書類を流し読みながら、ときには判を押し、ときには破り

捨て、ときには部下を読んで調べにいかせたりしながら、最重要事項を確認する。

「???これは、本当か？」

どすのきいた不機嫌声に、しん、と室内が静まり返る。びゅおお、と冷気が渦巻くようだった。あつと青ざめて震えはじめる者までいる。だが、そんな空気を一瞬にして作り出した当人は、気にもとめなかった。

「本当か、と聞いている」

ほんの少し、苛立ちが増す。

書状を出した青年が弾かれたように立ち上がった。

「はっ、はい！本当ですっつ！さ、最近シユラグリス地方で特に????」

「そうか」

青年が言い終わる前に、彼は深いため息とともにそう吐き出し、がたと椅子を蹴っ飛ばすように腰を上げた。

刻み込まれたような縦じわをよりいっそう深くして、

「ならばとりあえず、視察にいかねばな」

低く、呟いた。

*

とりあえず歩いてみることにした。

がつつと、数秒前に拾った木の棒で地面を突きながら真つすぐに獣道を進む。時折ぐるるる、とかありえない唸りが聞こえて来たけど、無視。知るか。これはうんそう多分夢だ夢。

はあ、と軽くため息をついて腰を叩く。
それから、頭の中で状況を整理する。

あたしは、今、多分、RPG的に異世界に来ちゃってるっぽかった。

何でただの森じゃなくて異世界かつちゅうと、そこかしこでもすごい合成でもしない限り地球ではお目にかかれないような奇妙な動物が跋扈していたからだ。

鰐みたいな口をした犬みたいな体にトカゲの尻尾みたいなのが生えた、一つ目の生物とか。

一方の頭はむしゃむしゃ草食べていて、もう片方の頭は木を舐めているカバと兎を混ぜて蝶の羽根をひつつかせている大型動物とか。うん。はは。なんだそら。あたしは格ゲーのが好きなんだよ。

にしてもつつまんない夢だなあ。
ぐるんつと木の棒を回して放り投げて爪先で一回蹴ってキャッチする。

(今でも出来るか……)

ちよつと笑って、あたしはもう一度その曲芸もどきを繰り返した。

ぼん、ぼん、ぼん、と樹皮を叩き、狭くなった幹の間を通り抜ける。うお、髪ひっかかった。いてえ。慎重に外して、転がるように向こう側へ。

ふいに。

ぐわつと視界が開けた。

青空が広がる。空気が冷たく、気持ちいい。風が吹く。
鳥の、声、が。

『陛下』

?????密やかな声が、聞こえた。

3 嫌な予感は大抵当たる

……へいか？

?????つていやいやいや突っ込むところじゃないよ何今の声。どっからきたよ。こえー。ホラーじゃんか。

(なのに、何で今あたし喜んだ?)

たらーっと冷や汗が流れる。

喜んだ、というか。

なんか、あたしはさっきの声を聞いた瞬間、高揚、した。多分。不遜に笑って振り向いて頭をわし掴んでやりたくなった。????つてちよつとまで自分おかしからソレ。どうした。

『陛下』

「ぎよあ????ツ！」

本気で飛び上がった。な、な、な。

ぱつと振りかえると真後ろになんかいた！ちよメリーさん ?!

「だ、な、は ?！」

『陛下。わたくしたちの陛下。麗しき漆黒の王。ああ、どんなにあなたさまをお待ちしていたことか』

え、初対面ですよね？

頭に山羊の角みたいなのを生やした、超絶美人のお、おん……女、の……ひ、ひと? がものすごい優雅な仕草であたしに跪く。どく

ん、と心臓が鳴った。それは青春の甘酸っぱいあのなんちゃらんちやつまり恋の衝撃なんかじゃなくて。

何かを、思い出させられるような。

「おまえ、だれ？」

言うてからはっと口を押さえる。うわ、なんか高圧的…でもないけど、偉そうな言い方だったような。やばー、怒らせちゃったかなあ。

ちらつと山羊頭の美人を窺う。と、彼女??彼???はうつとりとそのまなこを潤ませた。

『その冷めた口調…お久しゅうございます……それに、なんて麗しいお声』

(え、えええー?)

いやああなたの顔が麗しいよ。

心中で突っ込んであたしは微妙に引いた。なんだこいつ。

「はじめまして、だよね」

『はい、今のお姿では』

今の、て。

なにそれ。

違う姿なら会ったことあるってか？

あほか。

「それ、たぶん、別人」

『いいえ、覚えていらっしやらないだけです。直ぐに、分かりまし

た。あなたのその、高潔な魂。美しい魔力』

ぎよぎよぎよ。

寒い。

げー、と青ざめてから、ふと、気付く。

さわさわと、草がざわついた。

また、鳥の音がする。

?????魔力?

嫌な予感がばんばんするワードだ。

やべえ今直ぐこの夢覚めないかなほんとにもー……………?????

『あなただけが、わたくしたちの魔王陛下です』

……………ほらきた。

3 嫌な予感は大抵たる（後書き）

というわけで魔王降臨です。

……たぶん。

4 目眩がしますよ神様

「ほ、ほーう……」

魔王。

魔王ときたか。

頬をひくつかせて、据わった目で半笑いする。顎がかくかくした。うわ、外れそう。じゃない。

おい。

ちよつとまで。

内心ものすごい勢いで突っ込みつつとりあえず。

花の女子高生にそれはないんじゃないね？

それだけは言ってやりたくなった。なんていつかこう、神様みたいなやつに。

魔王とか。

アホか。

カア、と烏？？つぽく見えるけどよく見ると大分違う烏よりよっぽどアホくさい顔で不気味な烏が一声する。

あたしは、はん、と空を半目で斜に構えるようにして見やった。

知るか。

魔王とか。

何じゃそりゃ。

どこのベタベタゲーム。せめて勇者にしとけよそこは。魔王とかどうやって攻略して終わらせんだよやられちゃうじゃんか。

山羊頭は相変わらずうつうつとっている。嬉しそうに嬉しそうに、跪いたまま、見上げてくる。そしてあたしの手をとってぐっと、押し頂くように額にくっつけた。

やめれ。

どうなってんだ、とあたしはここにきてようやく思った。

なんか、これ、夢じゃなくね？

夢にしては意味不明過ぎるのにあたしの拙い脳みそは正常に働いてるっぽくて、感触はばっちり、いや感触とか夢だったら関係ないのかもだけどでも、なんか、これ。

本当に夢じゃない気がしてきた。

うん、いや、これ、多分カンだけど。ただのカンだけど。むしろカンオンリーかもだけど。

理窟とか論理的とか机上の空論……ってこれは違う……そういう確固としたもんじゃなくて。

ただ。

本能が告げる。

この馬鹿げた現実を受け入れると。

「……」

あたしは山羊頭の手から自分の手を引っこ抜いた。ぶん、と。

あのねえ。

魔王って。

いやそれはもう知らないってことにしたんだ。

うんてかその前に。

このドファンタジー。

ふざけんな。

「くそ……受け狙いならもっと可愛くてイケイケな子が熱血少年選べよな……」

ぎりぎりと歯噛みする。

ふつふつと苛立ちがこみ上げてくる。誰にたいしてもしれない、何にたいしてもしれない、反抗期の真つただ中みたいな制御し辛くて、でも抑えやすい苛立ち。ああ、誰かにぶつけてしまいたい。カアカア煩いわあんの似非鳥。空はこんなに腹立たしいくらい青くてまるで日本の田舎みたいに汚れひとつないのに、何だってこの森はこんなに暗い。何だって獣っぽい唸り声やら虫っぽい悲鳴やら、山羊頭やらに困惑しなきゃならない。怯えなきゃならない。

勝手にひとを呼び込んでいて。

苛立たせんな。

ぎっ、と山羊頭を睨みつける。ぴしいつと山羊頭の美人が背筋を伸ばす。

魔王？ 知るか。

異世界？ 知るか。

ひとが良い気分で寝てたところに面倒ごと被せやがって。

神様だろつが魔王のなんちゃらだろつが知ったこつちやない。

好きにやっつけてやる。

女子高生をなめんなよ。

『へ、陛下……？』

おそろおそろの問いかけてくる多分臣下に向かって、あたしは、たぶん獰猛に笑った。

「おまえ、名前は？」

腰に手をあてて、開き直ったように聞く。そういえば、彼女（多分）の名前を聞いていなかった。

軽く首を傾げると、彼女は驚いたように不思議な光彩の眼をまん丸くする。

『え、あ、いえ私は……？？？、ッ』

どもりどもりだった山羊頭は、ふいに眼を鋭くして、勢い良く振り返った。

『へ、いか、お逃げ下さい！ 人間がやってきます……？！』

「は？ や、あたし、人間だし……」
『寝言はおっしゃらないで下さい！ …？あ、陛下のお姿なら騙し通せるかもしれませんが、ですがなるべく遠くにお逃げ下さい。悔しいですが、私には今、陛下をお連れして逃げる術がなく……』

「あ、いいよいよ別に。……？おまえだけなら、逃げられるんだね？」

美人は怒ると怖い、と思いながら彼女をなだめ、確認する。たぶん、彼女たちのような存在は人間にとっては排除すべき敵なんだろう。めっちゃくちゃ切羽詰まってるし。

山羊頭がこくりと頷くのを見て、あたしはひらひらと手を振った。

「じゃ、またね」

『必ず!』

多分また会えるだろうとふんで適当に言っと、強い語調で返してザツと彼女は消え失せた。うわお。あたしはちよっと吃驚した。一瞬だけ吹いた微風に肩より下くらいの黒髪がふわりと舞い上がる。

(さてと……)

人間、ねえ。

全然足音とかしないんだけど、と踵を返し。

「???あ、???く??て……」

ずっとこけそうになった。

本当にいたよ!

あいつ、どんな耳してんだ! 超時間差!

ぽりぽり首の後ろあたりを掻いて、声がした方を窺う。のこのこと。

(あたし、見た目ニンゲンのほうだしなあ……)

多分大丈夫だろ。

そう、油断して。

一步、草道を踏む。

さくり、と。

鳥の音が止んだ。

かわりにあの、小鳥の甲高い声が、一鳴き。

赤い外套が翻る。

金色の髪。

深い銀の瞳。赤みの、強い。

「?????おまえ、魔物が」

とてつもなく綺麗な声で、恐ろしいほど綺麗な少年が、言った。

……………あれ？

(ええええええええええええ?)

何で、魔物確定。

見た目容姿の差はありすぎるほどあれどほとんどおまえと変わらないだろおお?!

「……………ええー？」

困り果てた声で、あたしは少年に呟いて。
思いつきり眉尻を下げた。

「ねは、結構まずそうな感じ。」

4 目眩がしますよ神様（後書き）

ちよつと長くなつてしまいました；；

主人公、開き直りました。

でもピンチ。なかなか自由自在にできません。

人物整理はまた今度。名前が出てきてからにしますね。
では、お疲れさまでしたー！

5 珍獣は捕獲されるものです

「……………」

えーと。

やべー、どうしようこれ。

だらだらと頬を伝い落ちる冷や汗及びあたしの心境と反比例して鬱蒼と茂る木々は爽やかに揺れ、森特有のどこかひんやりとした空気を醸していた。

金色の、ものすごい美少年の髪をなびかせて。

「ひ、人違いじゃないかなー」

とりあえず誤摩化してみる。

……なんか自分でもお粗末過ぎる言い分になった。人違いって何だ。

ぴくりと少年の柳眉が動く。無表情に、ほんの少し亀裂が入った。ほんの少しだけ。

その変化にあたしが瞬きすると、少年が薄く唇を開く。

「???確保しろ」

マージーカー……………。

問答無用でひっ捕らえられ、おまけに一回無様に転ばされ、あたしは超おバカな囚人よろしく目隠しされながら連行されたのだった。

……いやマジでどうすんのこれ。

ひくひくと頬を引きつらせて、あたしは必死に意識を保った。

*

簡素な場所にまるで人間のような見目の魔物を押し入れ、自分も中に入る。周囲の兵士達がぎよつとしたようだったが、諫めてきた騎士を、淡々と「魔物を監視するのは王族の務め云々」とのたまつて黙らせると誰も何も言わなかった。小さく息をついて魔物の前に座り込む。

目隠しをされた魔物は、まだ年端もいかぬ少女の風情をしていた。一見ただの人かと思ひ紛いそうだったが、魔物には自分達と全く同じ外見のものも多い。この魔物もその類いなのだろう。

彼女ーというべきか彼というべきか？？は奇妙な格好をしていた。白い簡素な、労働者が着るようなシャツはともかくとして、その上に羽織った不思議な布、膝丈の短い下衣。平べったい靴。

(これが魔物の標準なのか……?)

だとしても何とも微妙な違和感だ。

ぱつと見た限りでは、そんなにおかしく感じないのに、よくよく見ると小さな疑問が浮上してくる。そんな服装だった。

そこまで考えて彼は頭を振った。いや、今はそんなことはどうでもいい。この魔物が突然暴れでもしないよう見張っておかねば。

じつと黒髪の少女の姿をしまった異形を睨む。まるで絹糸のような短めの髪は触ると溶けてしまいそうなほど、さらさらして見える。白い頬は微かに青ざめ、柔らかかそうな唇はどこか困ったような表情を見せていた。

ふいに、するりと魔が差すように、奇妙な衝動が沸き起こった。

「……おい」

極力抑えた声で魔物に呼びかける。ぴくりと一瞬身体が揺れ、彼女は緩慢にこちらへ向き直った。目隠しで視界を塞がれているというのに、布越しのあの黒瞳の焦点はきつちりと合っているかのよう
に錯覚してしまうほど、まっすぐに。

「なぜ、あの森にいた」

心臓が鳴る。どくどくと血が巡る。彼は、慎重に話しかけながら、漸うその事実を認めた。??その眼を隠されてなお、この魔物は美しかった。

ひゅつと赤い唇が引き結ばれ、ひとつ、沈黙が落ちる。もとより返答は期待していない。諦めて、彼はだらしなく片膝を立てた。
と。

「知らない。気づけば、ここにきていた。……魔物と思っているのに話しかけてくるような酔狂な人間に会えるとは思わなかったよ」

さりげなく皮肉るような物言いに、彼は片眉を跳ね上げた。

*

カビ臭いがたがたしまくる乗り物の中で、たぶん、あの美少年が話しかけてきた。一瞬ぎよっとして黙っちゃったけど、一応素直に

告白して、それから嫌味を付け加えた。そうすると微妙に少年がむつとしたような、何とも言えない空気が伝わってきた。あー、こういうの、見えてないと敏感になるんだよなあ。

それにしてもこの少年は一体何者なのか。

なんかやたら偉そうだけど。

な割に魔物と思ってる存在の真ん前に座ってさらに話しかけたりしてくるけど。

……なんなんだろう。

ため息をつきたいのを堪えて、背後の、木の匂いがする壁のようなどころにもたれかかる。髪が一筋、鼻先まで落ちてきた。ついついの癖で払おうとして、手首を縛られていることに気付く。ぐいっと引つ張ってしまったから、ちよつと痛かった。

これからどうなるんだろうか。

何だかすごい勢いで罪人扱いされいる??ていうか、魔物扱いか。まあどつちにしても、焼き殺されそうで激しく嫌だ。でも逃げるのは到底無理そうだし。あんまり粘り強い性格でもないから、上手く立ち回ることも出来ないだろう。

何でこんなことに、とげっそりしつつ、だけどこれが自業自得だ。ってことも自覚している、妙なところで爺臭い自分の性分が憎らしかった。

(あーあ。せつかくあのひとが忠告してくれてたのに、油断したからなー)

でも一応ニンゲンのつもりなんだけどなあ。

あー、毒牛乳飲みたいなあ。

てか誰だよほんとにあたしを呼びやがったの。

そんなことをつらつらと考えていると、不意にごとん、と大きく

車体（多分）が揺れた。

（おわっ）

がくんと前倒しになる。ずべしっと思いつきり、受け身ひとつとれずに顔面スライディングする。いつつつてええ。

何故か猿ぐつわをされていなかったから、口を強打した。なんか切れて気がする。ほんつと痛い。

低く呻いていたら、ぐいつと腕をひかれ、無理矢理立たせられる。吃驚してまた転びそうになると、今度は肩を引かれた。なな、何すんじゃこら。

「???降りる」

着いたぞ、と耳に落ちる声に、つられ、外に出される。

生温い風が吹いて、ひとの匂いが鼻をついた。その一拍後、盛大な喧噪が、耳の奥へと広がる。

あたしは何ともなしに確信する。

???街、だ。

これ絶対逃げられないわー、とあたしは半笑いした。

5 珍獣は捕獲されるものです（後書き）

主人公連行されました

ちよつと行間が少ないです…お、お疲れさまでした。

なかなか少年の名前を出せない…；；

ちなみに砂花は苺牛乳が好きです。バナナオレより好きです。

6 異世界に母乳はありません

かつ、こつ、と足音が響く。自失しかけたまま引っ立てられ、何故か解かれた手の片方をわし掴まれて、えんえんとあたしはどこかひんやりとした建物の中を連行された。どう歩いているのか、もうほんつとさっぱり分かんないけど、進むにつれてどんどん寒くなっ
ていつている気がする。あー、もうどうしよー。ほんとどこそこ
母乳乳恋しい。あれ飲めばきつと何もかんもがうまくいく気がします
だよ。??て、おわ。

「……つ、と」

がくん、と足場が下がった。ていうか、たぶんこれ、階段、だ。
気づかずにそのまま進もうとして、失敗したらしかった。超かつち
よわるく踏み外した。ぐわーはずい。

こんなときだっというのにあたしはその微妙な羞恥に軽く赤面し
て後ろめたげに俯いた。
と。

「?????う、わ ?!」

不意に目隠しが外された。

急に視界が鮮明になる。だけどずっと塞がれていたせいで、妙に
景色がちかちかして見えた。光りの度合いが強く見える。うわっぶ、
気持ち悪いかも。

じゃなくて。

あたしはぽかんと手首を掴む少年を凝視した。むかつくくらい綺

麗な面立ちの少年は、どうにも表情の読めない顔であたしから剥ぎ取った目隠し布を無造作に振り、懐にしまい込んだ。……ちよつと待て。明らかに囚人罪人用のそんなもんを、己の懐に入れんなよ。ポケットにペットボトルの蓋入れるようなもんだろ。??つてだからそこじゃない。いやそこも気になるけどそうじゃなくて。

「……なんで？」

「この城に入った以上、関係ない」

「……？」

どういう、意味だ。

なに。この城なんか魔法的な仕掛けでもしてあんの？

訝しげに眉を寄せる。続きを促すように少年を見上げたが、もう話は終わりとはかりに口を噤まれる。あたしは仕方なく追求を諦めた。あんまりあたしと関係なさげだし。

自由になった目を細めて、何にも遮断されていない視界に眼球が慣れてくるのを待つ。やがてごく普通に落ち着いた色合いを見せたそこは、ヴィクトリア朝時代の装飾みたいな、無駄にきらきらしい壁に赤い絨毯がぐわーっと敷かれた、長い長い回廊だった。合間合間にはこれまた華美なドアがどどんと鎮座している。何やら難解な外国語っぽい文字で文字が刻まれた札を吊るしている部屋もある。

文字？

あたしは、つい、足を止めてしまった。

そういえば、あたし、異世界しかも洋風にきちゃったっぽいのに、全然話し言葉に困ってない。

普通に喋って、普通に通じてる。

あ、れ？

なんでだ。

ぱしぱしと激しく瞬きする。ちよつと待て。何度目の待てか分かんないけどちよつと待て。おかしいだろそれ。何で？ RPG的な何かなわけ？ いやでもこれ夢じゃないっばいし。だったらそういうおかしいことは適用されんはずだろ。だって現実だし。現実。

そう、現実、だ。

誤摩化しようも、なく。

ぶわりと全身の産毛が粟立った。そう、現実、なのだ。おかしいことに。恐ろしいことに。むかつくことに。

連行とか、ほんつつとにやばいじゃんか。

どうやら色々ショックで軽く現実逃避していたらしい。冷水を浴びせられたみたいなのが分かった。急激に思考が回転し始める。戻る。理性と、怒り。苛立ちに恐怖。得体の知れない、気持ち悪さ。

どうすんの、じゃないよ。

何とかしなきゃ死ぬよこれ。

監禁、かもだけど。

うん。

目え醒ませ、あたし。

ばちりっ????????と、眼球の向こう側で火が弾けた。

炎が。

灼き切れるみたいに。

爆ぜる。

「どこ、向かってるの」

思いのほか低い声が出た。

ちらりと視線を向けられる。けどあたしは今度は少年を見なかった。

少しの沈黙のあと、たぶん結構お偉いさんなんだろう少年は律儀に答えを返してくる。

「地下最高裁判場だ。?????実質、拷問部屋だがな」

爆ぜる。爆ぜり、飛散する。火の粉が。赤い光の粒子みたいに。

あたしはいっぱいに目を見開いた。

「……………なんか、猫耳娘がいるんだけど」

はぁ? と思いつき馬鹿を見るような目で見られ、あたしは微妙に頬を引きつらせつつ、空いている方の指を差し伸ばした。くそ、

変質者を見るような目で見るなー！

そりゃああたしだって自分でもかなり間抜けな発言だとは思っけ
どわ。

だって本当にいるんだもん。

なんかやたら可愛い猫耳の外国風可愛らしさ三倍増しのおかつぱ
ヘアの、女の子が。

……なんか、本当によく分かんない世界だなあ。

あたしはすっかり脱力してしまった。

可愛い金色の髪の子猫娘は、青ざめた表情で、おどおどと、その
可愛い猫耳をぴこぴここと動かした。

?????ここ、城って聞いたけど、一体何の城なんだろう、なあ。
わからん。

7 認識の差異と嘲笑

へいそのカノジヨ可愛いねー、とナンパしたくなるような猫耳娘は、あたしを見てぶるぶると唇を震わせた。

……何故。

『魔物』だからか……？ こんな弱っちそうな見た目なのに。多少げっそりしつつ肩を落とすと、彼女は盆みたいなものを取り落としそうにしながら、何事か小さく呟いた。

「……………へ……………いか……………」

あーまたかー。

だからさー、きっとそれ人違いだと思っただよ。何が哀しゅうて女子高生が魔王なんだよ。まあもう突っ込まないけどねー。

……………ん？

やさぐれ気分ですう考えてから、強烈な違和感に首を捻る。

陛下？

この子、何であたしを陛下って言っただ。魔物と敵対してるんじゃないわけ。

ちよっとどういふことさ、とあたしは隣の美少年に目を向け。

「何をしている。さっさと持ち場に戻れ」

目をまん丸くした。

あんまりにも冷淡な物言いと、眼差し。本当に關心一ミリたつてない、みたいな。

あたしは少々むつとした。何様じゃこら。いや上司なのかもだけど。

「ちょっと。女の子に対してそれはないんじゃないの」

不機嫌に目を眇め、斜に構えるようにしてガンつける。刺々しく。こんなに可愛い子に、なんて態度だ。許せん。

めらめらーつと睨むあたしに、だけど少年は煩わしそうに眉をかめただけだった。

「おい。ちょっと聞いてんの？」

「黙れ。お前は今、自分がどういう立場なのか分かってるのか。今直ぐ殺してやつても良いんだぞ」

あたしなんかにも分かる程分かりやすい殺気を滲ませて言う少年を、あたしははんつと鼻で笑った。ばつかみたい。

心中で呟く。そのまま無視しようと思ったけど、猫耳娘が可哀想なほど真つ青になってがたがた怯えていたから、今度は同じ言葉をそのまま声に出した。

「ばつかみたい」

「何？」

「あたしにとつては心底どうでもいい、この綺麗な絨毯や綺麗な廊下を魔物なんかの血で汚していいわけ？」

「……洗えばいい」

「???馬鹿が。血が、洗って簡単に消えるようなものか」

冷めた気持ちで吐き捨てる。

たとえば表面上綺麗になったとしても。

染み付いて、消えやしない。血だけではなく、死すらも。

少年はあたしの言葉に少し怯んだようだった。プラマイを考えて、マイナス要素の方がでかいことに気づいたんだろう、不快そうに鼻を鳴らす。へん。勝った。あたしは内心でニヤリと拳を握りしめた。

「ほら、もつと優しくいいなよ」

「何故魔物に優しくせねばならん」

「……は？」

ぼかんと口を開けて、ぎぎぎぎと猫耳娘を振り返る。可愛らしいその耳をしょんぼりと垂らして、彼女は肩身狭そうに身を縮こませていた。

あ、え？

そうなの？

つまり一応あたしの配下ってか、民？？うわなんだこれ超違和感

？？？ってこと？

へ、へええええ。

いやちよつとまで。

「……何で魔物がいんの」

「奴隷だからに決まってるだろう」

「?????は？」

はい？

「ど、れい……?」

「そうだ。弱い魔物、従えられる範囲の魔物は奴隷として売り飛ばす。知らないのか」

何だその旧世代の遺物みたいな単語は。

呆然としてから、目の奥の熱を自覚する。

ふつつつと腹の底が煮えたぎる。

こいつらは、魔物を恐れているのではなかったか。

過剰防衛気味に魔物を捕まえているんだと。

思っ、いたのに。

奴隷?

どうして、そんな当然のような顔で、そんなことを、言う。

自分より弱いものだけを、押さえつける。

そんなことをしておいて、まだ魔物が怖いとぬかすか。

何だそれは。ちゃんちゃらおかしい。

恐れて過剰に反応するのと、馬鹿みたいに屈服させるのは違っ
に。

虜囚と、奴隷は、違う。

捕らえるのと、有無を言わせず従えるのは。

「なに、それ」

「生きてるだけ感謝したらどうだ」

感謝?

「????? 牢に繋ぐ方が正当な手段だと思っね」

「何だと?」

「恐れて閉じ込めるのは、むかつくけど、仕方ない。人間だから。期待とかしてないし。でも、」

どつちが魔物。

「弱いものだけ辱めて、何が感謝しろだ？ ふざけんな。おまえたちはどれだけ馬鹿なの。あの子たちが、何をした？」

捕らえられて奴隷にされて、手錠をされているわけでもないのに逃げられないほど弱い存在が、他者を損なうことが出来るもんか。

「?????痴れ者が」

さらりと黒髪が流れる。頬に落ちる。赤い絨毯、にあたしの影。高圧的に出た言葉を気にするほどの余裕はなかった。あたしは、たぶん、怒ってた。

「お綺麗なはその顔だけなの？」

皮肉気に笑ってみせる。揶揄するように。

一瞬カッとしたような表情になった少年だったけど、すぐに己を取り戻したらしく冷めた声で呟いた。

「さすが魔物同士だと、同情心が沸くか。麗しい仲間愛だな」

はん。

腰に片手を当てて不遜に返す。
下手な皮肉だ。

「汚らわしいと思ってるらしい魔物に対して、麗しいなんて随分迂闊な発言だね。まあ嬉しく貰ってあげようか。あたしはとても、優しいから」

「……減らない口だ」

「口が減ったら困るなあ」

軽々言ってから、くるりと猫耳娘を振り返る。
にっこり笑って、手招き。

吃驚したような顔で、うろたえる彼女に、「いいからいいから」と言つと、少年の眼光がまた殺気を帯びた。だー、ねちっこいやつだなあ。

「勝手な真似をするな」

「狭量だね」

「……何をするつもりだ」

おりよ。意外に冷静だな。むっかつく。

「名前を聞くだけだよ」

「名前？」

「そう。大事でしょ」

少年は心底不思議なものを見るような目になった。なんなんだ。眉を寄せて、暗に「何か文句あるか」と質すと。

「ルツチエだ」

「……はあ？」

「その魔物の名前だ」

「……何でおまえが知ってんの」
「俺がつけたからだ」

はあ？

「なんでおまえがつけんの」

「俺にあてがわれた奴隷だったからだ。文句あるのか」

「文句っていうか、ぐちゃぐちゃ言つわりに名前とかつけちゃうんだね、っと思っただけ」

ペットじゃないんだから。

ていうか。

「もとの名前は？」

「ない」

……あ、そう。

そうなんだー。

「えーと、ルツチエ？」

「！は、はい」

おお、予想通り綺麗な声。
あたしはからりと笑った。

「耳可愛いね」

ルツチエはぱっと赤くなった。

だって、よろしく、っていうのはなんか違うような気がしたから
さ。

まあそれはともかく。

じろりと美少年を睨めつける。

?????こいつ、むかつくわー！。絶対合わん。
けっ、とあたしは内心で悪態をついていた。

7 認識の差異と嘲笑（後書き）

登場人物整理 2

ルツチエ

猫の耳に、ヒトの身体の魔物。

金色の髪、翠の瞳。

城で奴隷として働いている。

8 残酷劇はまだ始まらない

ルツチエはちらちらあたしを窺いながら、付かず離れずの距離であたしたちのあとをついてきた。

……ううわあたしたち、だつてさ。うへえ、不愉快。

「……ねえ」

「なんだ」

しっかりと握られた手首をぐらぐらと揺する。

「これ、離してくんない？」

「駄目に決まつてる」

「あたしルツチエの方がいい」

「魔物同士で逃げる気か？」

ふん、と少年、無表情に鼻を鳴らす。にあわねー。なつてないんだよ姿勢が。

「そういう迂闊なこと言うのやめなよ。今迄どんなに嫌なことされても逃げられなかったような子が、亜荷物つれて逃げれるってか？」

「……魔物に嫌も何もあるか」

「虫にキスされて嬉しい？」

冷ややかに言うのと黙ってしまった。強烈だったらしい。ていうか、もしかして想像したのか？うわー。

「へんたい」

「お前が言っただらろうが！」

「あたしは嬉しいか聞いただけなんだけど。想像するのが変態なんだよ」

「うるさい、?????これから斎場だ。黙れ」

……斎場？

「拷問部屋……もとい、地下最高裁判所なんじゃなかったの？」

「正確にはな。だが、そこでは穢れを必ず落とされる」

あたしは盛大に眉をしかめた。苦々しく唇を歪める。つまり、頭を切られたりするわけか。

ふざっけんな。おまえらにとっちや魔物は骨の随まで穢れてんでしょうが。

苛々と髪をいじり、赤い重厚な絨毯を蹴りつける。少年が避難するような視線を送ってきたけど無視だ無視。

(だーもー苛々すんなー……)

忌々しく瞼を下ろしたとき。

ふっ??と。

灯りが消えた。

より正確には壁に設置された燭台の火が落ちた。
瞬く。

「……停電？」

とりあえず現代チックなことを呟いてみる。すると少年が何だそれほとでもいいいたげな顔で説明してくる。

「たんに拝神術を使っただけだ」

「はいしんじゅつ？」

「神より賜った解き明かしてはならない力を使うことだ」

……えーと、なんかそういうばかには分からない言い回しするのやめてくれませんか。

かみよりたまわった、ときあかしてはならないちから？

何だ何だ、つまり不思議能力ってこと？ 白魔導師的な？

「分かった！ つまり魔法ってことか！」

さすがRPG！

晴れやかにうんうんとうなずく。が。しかし。

あたしの簡潔な言葉に少年は血相を変えた。

「馬鹿か！ 恐ろしいこと言うな！ 魔法は魔物、??神の干渉外
の存在が行使する力だ！ 冗談でも、いや、少なくともこの城の中
はそんなことを口にするな ！！」

「え、ええ？」

ものすごい剣幕。

ちよちよちよ、眼え怖いつて。え、何。駄目なの？ 何でさ。

変わらないと思うんだけど。そんな禁句だったのか。

「似たようなものだと思うんだけど……」

「お前、自分の魔力と俺たちの拝力を同じに見る気が ？！」

いやいやいや。

自分のも何も。

「あたし、魔法とか使えないし」

あっさり暴露する。と、ルツチエが驚いたような表情で小さく声を上げた。

少年は馬鹿などでかでか書いた顔で眼を剥いた。

「そんな……だってそんなに美しい魔力が……」

消え入りそうなルツチエの声。うんごめんねー、なんかみんなそう言うけどないですよ。多分それマボロシか勘違いだから。うん異世界召還にはありがちだよ勘違い！ くあー泣けてくる。

本当にさあ。

何でこの世界には苺牛乳がないのかねえ。

信じらんねー。

ふう、ともう何度目になるか分からないため息をついていると、少年は「まさか」とか「そんな馬鹿な」とか色々ぶつぶつ呟いている。正直怪しい。やめてくれ。隣でそういう危ない行動に走らないでくれお願いだから。いつ他のひとが通るのか分かんないんだし。

……あれ。

そういえば、ひと、通んないなあ。

ルツチエだけだ、通行人(？)。

「おい少年」

「しよっ???……なんだ」

何故そんなに驚く。まあいいけど。

「何でこんなに人気がないの？」

ぴたりと少年の足が止まった。でも多分別に、あたしの質問が聞
いちゃいけないことだったわけじゃなく。

目の前に堂々とあらっしやる黒塗りの扉のためだ。

……なんて不吉な！

あたしはくらっとした。

黒々と塗られ彫られた大きなドア。蝶番は金色で、あの……なん
ていうんだっけ嚴重警備ようの四角い金属の鍵箱みたいなやつが三
つもついてて、さらに鎖がかけられている。うーわー嫌な予感ばり
ばり。もうほんつとにどうしよう。

「この通路はほぼ人員の配置をされていない」

「???へえ？」

「もちろん『影』はいるが。だが何かない限りやってこない。ここ
は滅多に使われない斎場までいくだけの道だからな。必要ない」

「へー……あれ、でも他にも部屋とかあったよ」

「あれは王族の血を濃く引くものが居座ったり、奴隷の部屋になっ
たり、使用人の倉庫になったりしているだけだ」

「組み合わせが色々おかしい気がするのは突っ込まないでおう」

ふんふんなるほど。

でも、それにしても。

「やっぱり少な過ぎない？」

「……まあ、今日は大物の裁判だしな」

「おおもの？」

「おまえのことだろう」

あ、そうか。

やや呆れた風なのが甚だむかつくがしかし忘れていたあたしが間
抜けだったのは否めない。くそう。

「上の奴らはもう中に集まっているんだろう。中級役人以下は大方
ここを通らないようお達しがでているはずだ」

「ふーん……」

お達し、ね。

それくらい、あたしは『危険物』なのか。

ていうか、どういう基準で大物とか決めてんだか。

どこまでも弱くて役立たずで、特殊な能力ひとつないあたしが。

ここまで恐れられるなんて。

馬鹿みたいだ。

腹の底にひんやりとした感情が燻る。

それは胸の奥まで這い上がり、とぐる巻き、浸透する。

あたしは、ひどく冷めた心持ちで、どうでもよさそうに少年を見
る。

「殺すの？」

あたしより頭ひとつ分は大きい少年は、あたしの言葉に少し詰まったようだった。

ただとすぐに、是と答える。

「そうだ。当然だろう、お前は魔物なのだから」

砂を噛むような声。

あたしはじっと、瞬きもせずに見据えていた眼差しを扉へ戻す。

「……ふうん」

ため息が、あたしの中で溶けて消える。

「つまんない男だね」

精一杯の軽蔑を混めて、あたしは零すように呟いた。

だから少年の表情に、気づかなかった。

足場が瓦礫の如く崩れてしまったかのような、その表情に。

魔物だというだけで。

彼らはどれほど狩られ辱められてきたのだろうか。

そう思うと、少しは良い人間かと思っていた少年ですら厭わしくなる。……奴隷に名前をつけたり、魔物に話しかけたりするようなやつが。そんな風に断言するなんて。

なんて馬鹿げた茶番。

何が穢れを払う。

何が裁判場。

馬鹿じゃないのか。

ルツチエも、あの山羊頭も何をする風にも見えなかったのに。

ああ、吐き気がする。

それもこれも全部毒牛乳がないせいだ。ぜったい。絶対そうだ。

ああもう。

あたしは、誰になんの為に呼ばれたんだ。

?????そうしてグランギニョルみたいな場へ続く、黒塗りの扉が開く。

8 残酷劇はまだ始まらない（後書き）

このつまらない男だね、がものすごく書きたかった場所のひとつ
だったりします。まあのちのち。

失礼しました。

9 純白のマリアは頼れない

ぎいいいいい、と両開きに無駄に荘厳な扉が開く。うーわー、千手観音とか出て来たらどうしよう。泣くわー。

しんと静まり返った室内には所謂円卓なるものがどんとあって、その外回りにずらりといやに重そうな神父さんが着ているような衣服を纏ったおじさんお兄さんお姉さんらが、一斉にこっちを見た。ぎよえ。ひくりと頬が引きつる。こ、こわー。黒い大理石の床がきらりじゃなくてぬらりと底光りした。ああ全てが不吉。

あたしはいたたまれなさ過ぎてそろりと後方に目を逸らした。そこには、

「……マージーカー」

でっかい深紅のシルクっぽい布を贅沢に使い、さらに金銀宝石で飾り立てられた王冠を被った壮年の男。

あれって王様ってやつじゃね？

極限まで引きつった顔が見えたのか、手前に座っていた赤い髪の毛が眉をひそめた。ド派手な布をターバンみたいに巻いている。どこの民族だおまえは。八つ当たり気味にツイッコミそうになって寸でのところで引っ込める。

代わりにため息をつくど、少年に腕を突かれた。いてえ。

「何？」

「喋るな。陛下に跪け」

「はあ？」

なにそれ。

極々小さな声で囁いてくる少年をほとほとあきれ果てて眺めやる。

「馬鹿じゃないの？」

びっくりと少年の眉が引きつった。

「なんだと？」

「何で罪人扱いしてる人間にそんな無意味なことというわけ。普通きかないでしょ。そもそもあたし、臣下でも臣民でもないから」

冷然と言い捨てると、あたしの言い分に納得してしまったらしい少年はむっつりと黙り、しかめっ面をし、しかしまた口を開いた。

「?????それでも、だ」

「?????、」

あたしは、ふと、ひとつ瞬きをする。

少年の苦々しい口調には。

なんだか、追求し難い真摯な色が混じっていた。

……なんなんだろう。

「へーか、つて、どれ？」

あたしはわざと大きな声で尋ねた。少年はぎよっと目を剥く。円卓に座る人間たちは目尻に険を刻み、これまた揃ってあたしを睨ん

だ。

ふん。

黙ってても殺されるなら、優しくしてやる義理なんてない。
たとえ少年が『良い人間』の部類に入るのかもしれない。
関係なんかあるもんか。
ましてや。

「????? 私が王だ」

真っ白いマリア様みたいな像に挟まれて、奴隷なんて言葉すら知らぬ気にふんぞり返ってる男になんか。

「へえ、?? 朕とか余とか、言わなかったただけ遠慮深いのかね」

ひっそり皮肉を呟けば。

「!」

背中にギロチンが迫る。

ちりりと目の奥が熱くなる。爆ぜる火の粉を受けるみたいに。
足が引き攣れるような感覚がして。

舌が一瞬乾いた刹那。

あたしの身体が勝手に動く。

ギロチンはあたしと少年の間すれすれのところを通ってまた舞い戻った。

(……………つな、んなななんつちゆうもんがあるんだこの部屋！ ていうか少年いるのに！ いいんかい！)

こっそり冷や汗を流しながらぎぎぎぎと振り向く。少年は眉一つ髪の毛一筋動かさず、泰然と立っている。く、くそう。なんか負けた気分。ちよつとカッコいいじゃないか。むかつく。

「…………ベルヴェエラ、気をつける」

低い美声。目を向けると、思った通り先ほど王と名乗ったばかりの男が無表情に呟いた。

「あら。殿下なら大丈夫ですわ、陛下。だってこの国の第一王子がこんな罪深いものに傷つけられるはずありませんもの」

ふふふ、と褐色の髪の毛の女性が妖艶に笑う。どうやら彼女がああ、ギロチンを動かしたらしかった。

?????つて、は？

「……………お、おうじい？」

ぱつと振り返ると、少年が当然のような顔で見返してくる。

……………ゴ、こいつ。

まるでそれがどうしたとでも言いたげな顔しやがってええ。

「お、う、じ？！」

まん丸く目をいっぱいまで開き、再度問うと、『王子』は面倒そうに頷いた。

「ああ。フレデリック・アルワンド・ランズウィック。レリニリオン。このレリニオン王国の王位継承権第一位、今上陛下の第一子だ」

「……」

「マージーかー。」

てかなんでそんなに他人事っぽいんだよ。

いやそのまえに。

「フレデリック？！ 何それ似合わねー！ そんなまさに王子っぽい名前なの？！ ほんとに?!」

だって魔物に普通に話し掛けてるよ?! いやあたし魔物じゃないけどさ!

小娘にやりこめられてるし硝子の靴さしだして「結婚して下さい、マイプリンセス」とか「まるで小鳥のさえずりのような美しい声ですわ」とか「あなたはどんな麗しい薔薇よりも美しい宝石だ」とか言わないよ?!

……いや王子でもそんなこと言わないか。言わないよね。うん。どこの童話。アホだあたし。

心無しか少年の無感動な目が殺気を帯びたかと思うと、いきなり剣を突きつけられた。ただし、少年?? もといフレデリック王子じ

やなくて。

「貴様！ 魔物の分際で殿下を愚弄するか！」

なんか血気盛んそうなさっきのターバン巻いた赤髪男に。

首すれすれにちやきちやきと剣先が触れている。……ちよ、待て待て落ち着けこれ触ってる。触ってるよ！ 切れる！ 切れるから！

「ちよま、どうどう。落ち着け」

馬にするみたいにな、どうどう、と両手で男を制する。が、やっぱり逆効果。

ざらりと翻った鉄色に、どろりと怒り眩んだ男の眼。

(?????ツ、刺さ、)

る、と。

きつく片目を閉じて片目を寄せる。

「座れ、アレクシス。まだ円卓は開いていない」

だけど剣はあたしに届かなかった。

「王子……ですが、」

悔しそくに赤髪男が剣先を揺らす。うおお危な。

なんだか斬られなかったらしいけどあんまり実感がわかなくて、拳を握ったり開いたりしてから、アレクシスとやらをてのひらで制

すフレデリックを窺い見る。

眼が、合った。

「……………円卓？」

ありがとう、と言おうとして。
でも違う言葉を口にする。

……………『少年』が、お礼を拒んでいるように見えたから。

だけど『フレデリック王子』はやっぱり表情の読めない顔で。

「ああ、おまえの処罰を決める」

淡々と、答えた。

二体のマリア様みたいな女神像が硬質に微笑んでいる。まるで無慈悲に。まるで無関心に。

心など欠片たりとも満ちぬ笑みで。

?????ルツチエ。

扉が閉まる前、青い顔をする彼女を見て、
なんとなく笑ってしまったけど。

……誰か、助けてくれないかなー！。
あたしは半ば本気で思った。

9 純白のマリアは頼れない（後書き）

登場人物整理 3

フレデリック・アルワンド・ランズウィック＝レリニオン
レリニオン王国第一王子、第一位王位継承権保持者。
金色の髪、深みがあり、赤みの強い銀の瞳。
これでも15歳（もうちょっとで16）。

苦勞性の王子。硬い口調もいつかは崩れます。たぶん！

10 人の話は聞きましょう

気づけば中世の拷問具みたいな背の高い椅子の上。

ひくひくと頬が引きつる。円卓のど真ん中、つまりあたしに視線が集中する。

(……やべー)

マジで誰か助けて。いやほんとに。

ぴったりと両腕を肘置きにベルトみたいな硬いもので固定され、くるぶしを椅子の前足とくっつけられている。首に白い布を巻かれ、真後ろには憤怒の形相でこっちを睨んでくる赤毛男。確か、アレクシス？ とか呼ばれてたやつ。

何故か眼は覆われていない。こういう場合目隠しをするんじゃないだろうか。まあされないに越したことはないけどさ。

「！」

いつ、と目尻をしかめる。ぎりぎり、肩にアレクシスとやらの指が食い込んでいた。やべーマジいてえ。なにこいつ。花の女子高生になにしゃがる。

頭を固定されているから、視線だけで睨む。かち合った。今にもあたしを喰い殺しそうな眼だった。

獣みたいだ。

眇めた眼を不意と逸らす。どうやらこの男は魔物全般が嫌いらしい。……っぽかった。そういう手合いはいちいち反応していたら面倒なので気にしないことにする。その間にもぐいぐいと爪が食い込んできても。気にしない気にしない。宗教イシキの強いニンゲンに突っかかっちゃいかんと太古から決まってるのだ。宗教戦争ほどうざりたいもんはない。うん。

「魔物二万八千五百七十六号」

……え、それ誰のことですか？

しかしながら今ここにいる“魔物”なる認識にあるのはあたしだけである。

いやいやいやいやナニその番号。名前ぐらい聞こうよ！ ていうかそれ、囚人何百何十何ちゃらく、みたいなヤツ？！ うわ何ソレすっごい嫌だ！

あからさまに不満気な顔をしてしまったらしく、フレデリック少年が思わず気に眉をひそめ、円卓に座る他のやつらは殺気を滲ませた。ちよつと短気過ぎる気がしませんかオニイサン。

「答える、魔物二万八千五百七十六号」

「あーはいはい何ですか」

大義そうに玉座に座する男へと適当に答える。呼び名には不満たらただけどわざわざ教えてやりたいわけでもない。面倒だし。

そっぴや山羊頭は大丈夫かなあ。あれから見つかってないといいけど。……見つかってないか。しゅんっ、だったもんね。しゅんっ。???。???。???。

(いっつだ！)

ぐいーっ、て髪を引っ張られた！

やったのは見なくてもわかる、あの赤髪ターバン野郎だ。くそおおひとが動けないからって好き勝手しやがって。

「この無礼ものが！」

「アレクシス。今はそんなことはいい。?????ですね？ 陛下」

「ああ。話が進まぬ。それは今でなくとも出来るだろう」

「……っ、は」

だからさー、捕虜に対して無礼ものも何もないって。

内心呆れていると、当社比で言えば穏やかな王族親子が取りなし
てくれる。むむむむ、つい感謝しそうになったがこいつらのせいで
こんなことになっていいるんだった。言わば悪の親玉だ。いや本当は
あたしの方がそうなのかもだけど。

……そういえば。

こいつらは、どうやらあたしのことを“魔王”とは思っていない
らしい。そんな様はとんと見えない。何よりさっきの『魔物二万何
千何とか』。魔王だったら魔王と呼びそうなもんだし。分かってて
敢えて言わないだけかもしれないけど。

うーん、やっぱりあたし、魔王じゃないんじゃないかなあ。あー
でも、魔物とは断定されたんだよなあ。何でだろう。基準は何だ基
準は。ていうか。

元の魔王は？

山羊頭は「お久しゅうございます」って言った。それに、ルッチ
エも『陛下』って言葉をあっさり言ったし、そういう存在があるっ
てことを常識として持っている。

じゃあ、その元の『魔王』は？

どこにいる？

(死んだ、とか？)

一番ありそうですごく嫌だ。

けれど、それならどうしてあたしを魔王と判断したんだろう。
生まれ変わりなんて言われたら目も当てられないんだけど。
ああもう分かんないことばっかりだなあ。

「??聞いているのか」

ぞくりとする美声。

王様だ。

「……はい」

一応年上っぽいので敬語。

「お前はヴァレリオの森にいた」

……ヴァレリオの森？ あ、起きたらいた場所かな。
じゃあ。

「はあ」

「最近、シユラグリス地方で魔物に襲われて近隣の民が多数被害にあっている」

「? ……はあ」

それがなんか関係あんのか。

そう、訝しく思った時。

王様の青い目が底光りした。蛇、の。目のよう。

本能的な嫌悪感がちりちりと能を焼く。

「彼らを襲っていたのは、お前だな？」

……待て待て待て待て。

何の話。

11 救いよりも劫火を

え、ええええええ。

ちよ、待て何それ濡れ衣！

何でそんな話に。王様つてば思考が突飛過ぎだつて。ていうかあたしあの森の外出てないし！ありえないから！

「イヤそれ絶対人違い。ありえない。ありえないから」

ぶんぶんぶんぶんと首を振る。ぐぐぐつ、と白い布が絡まる。い、いつてえええ。何この布。なんかぴりぱりするんですけど。これつてあれ？ あれか？ はい…はいなんとかって魔法。つてあー、魔法じゃないのか。?????じゃない。

首筋に剣先???何故今度は止めないんだ王様???を当てられて、油汗をかきながら、ぐるぐるする頭を猛回転させる。

今。

あたし、魔物。

今。

あたし、妙な濡れ衣かけられてる。

今。

あたし、民家を襲っているらしい魔物と認識されてる。しかも決定事項ばい。

……ひ、人殺し容疑っ?!

(ええええええええええ！ うそおなんでああいや違う多分まだ殺人未遂容疑だつてイヤイヤイヤさういう問題じゃないやばい何それまず過ぎる今まで補導だつてされたことなかったのに！ カツ井とか出

されちゃっわけ?! っていやこれも違う。ていうかそもそも魔物にそんなことしなさそうだしこのひとら??? ってああああ駄目だ混乱して脱線するよあたしの貧困な頭!)
なななな。

何だって妙な世界に引つ張られたと思ったら。

そんな明らかに白い眼で見られそうなジタイに。

嫌だ。

嫌だ、嫌過ぎる。

それはちよつと胸張って帰れないよ。ていうかこれ処刑っぽくね? まずい。まずいって。何でこんなところで死なにゃならんのだあり得ない。ちよつとこれ泣きそうなんだけど。てかなんか足も首も腕もぴりぱりする。背中がすんごい熱い。何これ。

「????? 漸く、効いてきたようだな」

思考が、止まった。

王様の美声。

あたしは、その苛立たしいほど整った顔を凝視する。

……なに?

なにが、効いたって?

「やはり、雑魚ではないようだな。あまりにも強い。我が国の最も力のある術師数人がかりでかけているというのに、こんなにあとから効くとは。????? 面白い」

クツ、と。

嗜虐的に、王様が、笑う。

それこそ魔王みたいに。

「……なに」

何を、した。

凝然と目を見開いたまま王様の隣に佇む王子に????フレデリックに、視線を移す。

分からない。

どうしてかは、分からない。

だけど、少年に問いたかった。

………愚かにも、善人だと、知らぬうちに信じていたからかも、
しれない。

「なに、が、効いたという?」

少年は感情の見えない眼で、微かに身じろいだ。

水面のように風いで、けれど複雑に沈んだ眼差し。

周囲の人間たちの空気が陰しさを増す。張りつめる。

合わせるようにして、背中の熱が強くなった。

「その椅子にかかる、拝神術だ」

どくん、と心臓が、一瞬、止まった。

ぴりりと、こめかみのあたりが熱を受ける。全身を灼き尽くすような感情がとぐるを巻く。

熱い。

背中だけじゃない。

身体中が、熱い。

ふつふつと何かが腹の底で煮えたぎる。

ああ。

これは。

これは怒りだ。

焦げ付くような怒り。

あたしの。

あたし、の。怒り。

カッと喉の奥いが爆ぜたように熱くなる。腕の、足の、指の、全ての関節という関節が軋みを上げる。頭痛が激しい。がんがんする。吐き気、も。ああこれ、こっちにくる前の気持ち悪さに似ている。でも、あの時より遥かに苦しい。痛い。熱い。

すすけた黒髪が舞い上がる。びり、ぱり、と光が爆ぜる。手首が灼かれるような感覚に痛打される。椅子の角が膝裏に激突した。痛い。痛い。

痛い。

「あたしは、誰かを殺してなんかいない」

痛みに軽く泣きそうになりながらあたしは少年を睨みつけた。

室内がざわめく。だけどあたしは少年だけを睨む。首筋に鋭い痛みが走って、何か赤いものが視界を過ったけれどあたしは気にしなかった。

少年の目が、わずかに揺れる。

追いつめられたかのように。

罪悪感にでも押しつぶされているみたいに。

……馬鹿みたいだ。そんなこと、あるはずがない。

あたしは椅子を、?????拷問具を蹴っ飛ばした。ごう、と風が舞う。

豪風が、吹き荒れる。

ばかりとその拷問具が炎に灼かれる。
悲鳴と罵声、怒声に絶叫が殴るみたいに押し寄せてくる。
だけど、あたしはただ、フレデリック少年を睨んでいた。

「あたしじゃない」

どうせ信じやしないだろうけど。
だけど。

あたしは、押し殺すような低い声で、泣きたくなりながら、呻いた。

最低。

最低だ。

ああ、きつと、これは王様に向けるべきなのに。

?????どうしてあたしはこんなに少年に失望してるんだ。

12 転がり落ちたつとぎは自覚する

ああ、母乳飲みたいな、とあたしはぼんやり思った。

鎖骨のあたりに汗のような、けどもつと気持ち悪い感触が伝わる。あたしはそれを無感動に見て、ぬめるそれを拭った。

赤い。

血だ。

さつき、アレクシスとかいう男がひつつけていた剣の先が当たったのだろう。あたしが思いっきり勢い付けてあの椅子から逃げた時に。

ごうごうと吹き荒れる風にこの中では随分と珍しいあたしの黒髪が舞い上げられた。ばさばさと無造作になぶられる。毛先がたまに頬にあたって微妙に不愉快だったけど、そんなには気にならなかった。ほんの少し、煩わしいだけ。

血がついた指を払うようにピツと振り、燃え上がる拷問具を見れば、それはもうほとんど塵と化していた。

どうして火なんか。

どうやら怒りは一度激昂したことで沸点を越えさらにそれ以上のナニかを越えたらしく、妙にあたしの頭は冷めていた。怨嗟の如く少年に唸った時には気づかなかった不思議に首を傾げる。

この、風も。

いきなり何なんだろう。

なんかあたしの周りで吹いてるけど。

ぼんやりと、あまり明朗としない脳で考えてから、ふと苦い気分になる。

(……まさか、)

これが魔法だとか言わないだろな。

こんな超常現象的な力なんてしょぼいつてかダサ過ぎる。それより傷をぱーっと直したりお菓子の家を作ったりの方が………いやどっちにしてもダサいか。何だろう、なんか魔法つてあんまり便利じゃないというか：面白みがないというか。つまらん。

大理石の床を踵で叩く。甲高い音と悲鳴が聞こえた。

「陛下！ お下がり下さい！ この魔物？？？なんて膨大な、恐ろしい魔力を！」

……はあああ？

王様が座る椅子の前で何だかやたらと物騒な、刀を半円状にして端と端を金属で繋いだような奇妙な形の武器を構えて、銀色の長い髪を緩く束ねた青年があたりを睨んでくる。恐怖と憎悪、それに侮蔑を含んだ眼差し。……むかつく、けど。さっきの発言の方が気になる。

膨大で、恐ろしい、『魔力』？

何を言っているのだろうこの男は阿呆か。一介の女子高生がそんなもの持っているわけなからうが。軽くいらつとす。うぜえ。と。

火の巡りが、強くなった。

(……え？)

あれ？

たらー、と汗がこめかみを伝う。ちよつとまで。まさか。

「……ほんとにあたし？」

茫然と呟く。

あたしの感情に反応して、このよく分からない超常現象が消えないわけ？

(マージャーカー……)

円卓に火が移る。幸いそれ本体は床同様に何かの石で作られていたものだったらしく、表面の装飾部分だけ焦げ上げて火はそのままゆらゆらと揺れていた。どうやらあたしが力任せに拷問具を外し、??認めたくないけど??あの暴風を巻き起こした時には円卓に座っていた奴らはさっさか壁側に逃げていたらしい。誰もが青ざめたり赤黒かったりする機嫌が良さそうとは非常に言い難い表情で身構えている。変わっていないのは、あの、ベルヴェラと呼ばれたギロチンの美女だけ。

褐色の髪を豊かにたなびかせる彼女は相も変わらず艶麗に微笑んでいた。めくれた唇が血のように赤い。豊満な身体を見せつけるように腕組みしている。うわー、美女っていいなー。あたしはついそんなことを思ってしまった。

あらゆる拷問で穢れを雪ぐ場であるこの部屋でも、さすがに暴風には耐えられなかったらしい。ばこばここと装飾品が割れ、破片となつて風に巻き込まれる。マリア像にも何かがぶつかつたらしく、頬や手の部分に小さな傷が出来ていた。この像を作つただろう職人のことを思うといささか心苦しい。気がする。

「おまえは……」

掠れた声にあたしは王様の方を振り返つた。
正確には、王の隣を。

「おまえは、何だ？」

フレデリック少年が瞬きもせず、あたしを見ていた。

この魔物は何だ。

彼は???フレデリック・アルワンド・ランズウィック・レリニオンはただ、茫然とその魔物を見ていた。

シュラグリス地方を襲ったという、凶悪な魔物とはおそらく彼女のことなのだろう。彼女と称していいのか微妙だが……「あたし」と言っていたから、きっと彼女と呼んで差し支えはない。

あの森で、他には魔物の気配を感じられなかったし、彼女の他に魔物の姿はなかった。こんな時期にあの森で堂々と立っていられるのは民を襲った魔物ぐらいであろうから。

何より、先ほど激昂した時の、全身を押しつぶされるようなこの魔力。ただの微細な雑魚には魔法を使うことも出来ぬこの『斎場』で、あんなにも凄まじい魔法を使ったのだ。もう断定するよりない。

?????そう、理性は理解し納得するのに、何故かそう思ったび彼は吐きそうなほど気持ち悪くなっていた。

彼の目の前で、彼に向かって激昂した彼女の言葉が離れない。輝く夜の瞳を、何故泣きそうだなどと思ったのか。

何故、彼女の舞い上がる黒髪を、血を払う指先を、白い頬を、その眼差しを。

美しいと思ってしまうのか。

そういう魔物なのか？

その容姿で人間を惑わし、陥れ、辱める。そういう、魔物なのか？

(……いや、)

おそらくそれは違うのだろう。

彼女のどこにもそんな素振りは見られないし、もし見せないよう

にしているのだとしても、あまりにも彼女の眼は綺麗過ぎる。

それに彼以外にこの魔物の美しさに魅入られているものはいないようだった。

少なくともこの部屋の中で、彼だけが彼女の美しさに圧倒されている。

ぶわりと、微かな優越感のようなものと苛立ちに身を灼かれ、額を押さえてそれを振り払う。??違う。これは、ただ、この魔物に恐れているだけだ。

こんな危険な存在は早く罰さなければ。そして殺めるか、どこぞの奴隷にするか???

『お綺麗なのはその顔だけなの?』

ふと脳裏に蘇った声に、彼は愁眉を開いた。

皮肉気に微笑った彼女の顔こそは、苛立たしいほどに美しく、だからこそ余計に腹が立った。

けれど、心底腹の虫の居所が悪そうな表情で、その寸前に言っていたことは、恐ろしいほど正論だった。

恐れて閉じ込めると、屈服させるのは、違う。

彼は愕然と、美しい魔物を凝視する。

いつ、間違えてしまったのか。

彼らは、彼らが恐れ嫌い憎む、忌むべき残虐な魔物と同等のことをしていたのだ。

*

放たれた言葉に眉をひそめる。

(『おまえは何だ』?)

そんなこと。

こっちが聞きたいよ。

こんな目に合わせておいて、何も言ってきたやがらないあたしを呼び寄せた誰かに。

もう何度目だか知れないことを、思う。

一瞬だけ睫毛を伏せて、唇を噛み締める。

どうして、屋上でサボってたあたしに魔法なんかが使えるの。
どうして。

あたしが魔王なんだ。

握りしめた拳に、こびりついて離れなかった血がぬめりと広がる。
あたしは、切実に、母乳が飲みたいと思った。

もとの世界で、あたしが一番好きだった、もの。

?????もしかしたら、もう一生飲めないかもしれないもの。

13 呼び声と郷愁

何が凄いつてこんな惨状でも王の椅子は傷ひとつついていないってことだ。

喉の奥が震える。鼓膜が朦朧となって、周囲の物音がたわんで聞こえる。あたしはそつと渦巻く風に触れてみた。冷たい、元の世界と同じ、ゆるりとした感触。暴風に煽られると前髪がぶわつと巻き上げられて微妙な圧迫感を感じたけど、あれと微妙に似ている気がする。ゆつくりと、指を振る。炎が風に巻き込まれた。くるぶしのあたりを旋回する。サーカスの火の輪みたいだ。

こつん、と一步、前へ出る。

途端、壁際に寄っていた奴らがそれぞれに構える。物の見事に息の揃ったそれは、映画で観ていたなら格好良いか揃い過ぎて逆に可笑しいと笑っていたかもしれないが、現実に自分へと向けられると本当に洒落にならない。小娘たったひとりに何ぎらんと光るもの抜いてんだよこええええ。ぶるりと青ざめ、けれどももう一步。

こつん。

大理石が鳴る。

漆黒が、まるで、深い夜のように。

「とまるがいい、魔物。それ以上陛下に近づくことはまかり成らん」

すつ、と黒いローブを着た、陰気そうな男が立ち塞いだ。まかりならん、とか難しい言葉言わないで欲しいんだけど。わっかんないってあたし馬鹿なんだからさー。ていうか何そのタロットの『隠者』のカードみたいな暗そうな格好。こわ！

まるつきり、「わしは黒魔術師である……」とか言い出しそうな見た目だ。低い声がくぐもってなかったのが惜しい。普通に聞き取

りやすく挑発混じりに「ぱどうん？」とか言えなかった。ちい。それに、手にしているのはしわしわの木の杖でも、水晶玉でもなくて、薄い板のようなもの。……あれ、なんかカードに似てる。それこそでっかいタロットみたい。ひゅ、と息を吸い込む。

「おまえは、あたしに何か命じられる立場なの？」

己を害すると決まっている相手の言葉を、素直に飲むほど現代女子高生は甘くない。従ったからって助かるわけでもあるまいし。

とまるがいい？

馬鹿か。

どいつもこいつも、まるで聞いて当然のように言ってくる。

きょうび村役所のじいちゃんだってもうちよつと話を聞いてくれる。忍耐が足りないんだよ忍耐が。どんだけ時代錯誤なんだ、？？
って時代も何もないし。

本当にどうなってるんだ。

(とりあえず)

少年院なんて嫌だ。

……いやそんな生易しい訳はないだろうけど。でも気分はうっかり喋り過ぎて暗くなって制服のまま帰りかけたら補導された、みたいな心境。補導されたことないけど。

じり、と胃の奥が凝る。凝って、冷えて、熱に変わる。??ああ。

死にたくない。

こんなこと、うだうだ女子高生していた時は思ったこともなかった。毎日もったり屋上でサボって。苺牛乳飲んで。結構危ないことも平気でして。そもそも殺されるなんて思うこともなかった。こんなに。

こんなに、生きたいなんて。

(?? 違う、)

生きたい？

死にたくない？

違う。

そうじゃない。

あたしは。

ぶわりとくるぶしから膝の裏のあたりまで囲うように炎が広がる。風が静かになり、けれど壁の方まで広がっていく。

そうだ、あたしは。

殺されたくないんだ。

こんな奴らに、根拠も証拠もない不愉快過ぎる冤罪で、殺されたくない。そんなことで、殺されてやりたくない。

魔物を忌み憎み辱めるこいつらなんかに、殺されてなんかやるもんか。

「……ん、なに……安い、命と？」

ふざけるな。

頭の奥で、光が明滅する。

冷えた怒りが再び沸騰する。

「どけ。その身を我が劫火に灼かれないか」

……小鳥の鳴き声が、聞こえた気がした。
嬉し気に誰かの名前を呼ぶ声も。

*

ルツチエは青紫を越えて土気色の顔で黒塗りの扉に貼り付いていた。

(どうしよう……陛下が……!)

幸いなことにこの長く、絢爛な様と裏腹に陰鬱な空気の高い通路は、ほとんど人が通らなくて、奴隷の自分が身動きひとつせずにも不審に思われることもない。まあそもそも思う人間がいないのだが。

ルツチエの主であるこの国の王子は、相変わらず表情の乏しい顔でこの中にかのお方を連れていった。

罪人を裁く場で、もっとも残酷だと言われている、この地下最高裁判所に。

ルツチエは耳を垂らして、ぐつと唇を噛み締めた。なんてことだ。折角お会いすることが出来たのに。そんな、奇跡のような名誉に与れたのに。

「なにも、??できない、なんて」

私はあの方の民なのに。

魔族、なのに。

遠く離れ、この身を奴隷なぞという卑しき場に墮とされ、日々同朋を殺してゆく人間達の王の子につきながら、それでも彼女は魔族だった。

忘れないと誓った。

違えないと誓った。

愛する故郷を覚えていると。

魔族の全てが善な訳ではない。当然だ。でなければ、こんなに残酷に追いつめられることはなかったし、たとえ力だけに、種族だけに怯えられた結果だとしても、判で押したように同じく愛せるような相手ばかりな筈がない。だって、個は違うから。

それでも魔族であることを誇りに思う。

あの、美しい王を、誇りに思う。

見た瞬間、脳髓に奔った、あの衝撃。

魂が創り変えられるような。

(陛下……ッ)

名前を呼んで、くれたのだ。

あの不可思議な王子に与えられた名ではあるけれども。

『えーと、ルツチエ?』

朗らかな声が耳朶を打つ。幻聴だ。分かっている。

けれど、何か、冷たく激しい衝動が胸を突いた。

震えるてのひらでぐつと蝶番を掴む。

「???イ、??、??」

小さく呟いて、押し開けようと、した時。

爆風と叫びと、??懐かしい声と一緒に彼女へとぶつかった。

*

おいで

おいで、 “ ??????????”

彼女は走っていた。

肉眼では把握しきれぬ恐るべき速さで疾走していた。

彼らの間では“あぜみち”と呼ばれる溶けた闇の地下道のような空間を駆けていく。途中で疎らにきらめく星屑のような光が額を強打し、微かに赤く染めるが当の彼女は一顧だにもしない。鱗に被われた裸足が必死に進む。

早く、速く、はやく。

早く戻らねば。伝えなければ。そして。

『陛下……っ』

彼女はぐつと唇を噛み締めた。美しい面を歪ませ、苦しそうに息をする。

刹那。

ふっ??と何かか神経に触れた。

それはどこか懐かしく、そして愛おしいもの。

だがそれは根幹だ。突き刺さるのは、確固たる意志と震え、そして叫び。

角がすり切れるように痛む。周囲は暗く、他に同族は見つけられ

ない。だからこの痛みは遠く離れた地にいる誰かの強烈な思いだ。それが、彼女の性質故におそらくは故意でなく伝わってくる。きつく瞼を閉じれば、それが誰なのか、彼女には分かるはずだった。けれど、どうしてか上手くいかない。

誰だ。これは誰。

これは?????

?????それはさながら白炎の暴発のようであった。あまりにも暴力的に、魂の芯を揺るがすほど激しいものであった。しかし、内包するそれは驚くほど美しく、灼き壊すようでありながら彼女という存在を肯定し構築しその身の傷を全て癒し尽くしていった。

『?????????』

額から汗が吹き出る。直ぐにそれは清涼な風のようなものに乾かされ、心の臓が高揚するような感覚に囚われる。

そして。

一瞬の衝撃と同時に彼女はもう失われたはずの名を叫んでいた。すなわちルピフェリナ、と。

零れ落ちた言葉は、まるで当然のように傲慢で、だけどあたしは戸惑いながらもまるで違和感を感じていなかった。

……いやいやいや、我が、とか何言ってるのあたし。どこのミュージカルだよ。

にわかには強ばった男の顔を見、熱を帯びた指を差し伸ばす。まわりつくと狐火みたいな炎が、ふわりと揺れた。

「貴様……、」

目線の一ミリ下ぐらいの位置に、男が灰色の板を構える。今直ぐにでも飛んできそう。なんか微妙に底光りしてるし、殺傷能力高そうだなあ。

だけど。

そんなものに、あたしが傷をつけられるものか。

自分でも訳の分からない確信がある。自信ではない。慢心でもない。自棄ですらない。

呼吸とともに、風が前へと暴れる。目を剥く男の手から、板が吹き飛ばされる。ロープのフードが舞い上がり、今までいまいち見えてなかった面があらわになる。

下にいくにつれて薄くなる金の髪。それが揺れ浮かぶと同時に周囲から異様な熱が襲いかかってきた。右肩に迫るのは刃、腹を狙うのは漫画で見たクナイみたいな暗器。足下をかすめた獣のあぎとに、取り巻くように充満した白煙。

そして頭部に数えて十七はある巨大な槍を投下される。

僅か一秒の間にそれらはあたしの傍まで奔り、

コンマ一秒で霧散する。

（……………いや、分かんないけど。コンマ二秒だったかもだけど。あれ？ ていうかコンマって何だっけうああああ超こわいんですけど容赦なっ！）

あんまり過ぎる危機をどうやら本能とか反射とかそういう原始に貰ったんだろう諸々の機能で躲すことが出来たらしいあたしは、多分無表情で固まった。ぞつと冷や汗が出る。肝の辺りが未だに凍り付いてる気がするんですが。死ぬかと思った。ていうか死ななかつたあたしすごい。誰か褒めて。そして和ませるこの空気。

そんな感じにあたしが微動だにせずにいると、かつん、とヒールから出るような足音がした。目を向ける。

「……………あは」

少年が、一步。

あたしに近づいた。

相変わらずの無表情で。

だから、あたしは、元の世界にいたころのあたしのように、に入らつと笑ってみせた。

早まる鼓動の恐れを無視して。

14 傲然と嗤え

どうしてあたしが魔王なのか。そんなこと考えてる暇も余裕もない。

そういうことだろ？ どこぞの誰か。あたしを召喚した誰か。

心臓がばくばくいつてる。くっそうあたしの根性なし。笑え。笑い切れ。ほら、少年が。

真つすぐ、あたしに向かってくる。

こくりと唾を呑み込む。笑みを引っ込めて、眉をひそめて。引きつる頬骨に精一杯力を込めて、再び唇の端を吊り上げる。

フレデリックは無表情だった。

「あたし、やってないから」

告げる。

だけど眉一つ動かさない。

あたしは微笑んだまま視線を落とした。思えば大理石の床なんて初めて見た。あのマリア像も、きつと本当は“マリア”じゃあないんだろう。だってここはきつと、地球じゃない。なんて下らないSF。

「でもどうせ信じないんでしょ。だから、あたしをその森に連れていけ」

「……は？」

「あたしが、本当にやった奴を、取っ捕まえてやる」

フレデリックが絶句する。あたしの風に攻撃を回避されたい男たちが、茫然自失から立ち戻った。……遅くないか。小娘一人しとめられなかったのがそんなに口惜しいか。アホか。攻撃するつもりがあるならさっさと構えればいい。あたしは絶対、死んでなんかやらないから。

はっ??と鼻で笑う、わざとらしい声が出た。

「馬鹿を言うな魔物。何故わざわざそんなことをしなくてはならない？ おまえの他にあそこに魔物はいなかった。それが全てだろう。そもそも違かったと言って逃がすような真似をする意味が分からない」

あたしはじろりと赤髪男を睨んだ。懲りない男だ。こいつ絶対モテない。

「馬鹿じゃないの。あたしじゃなかったら、おまえらの不手際で被害が増すんだよ。そんなことも分かんないの？」

あたしを捕まえたということで、もうあそこに討伐にはいかないだろう。少なくとも民家を襲う魔物を捕らえるためには。けどその魔物はまだきつというだろう。邪魔するものがいなくなって嬉々として人を襲うかもしれない。その責任を、こいつは持てるというのか?? 持てるわけがない。命の責任なんて、生きてなければ無に等しい。

「連れていけ」

だけどきつとあたしがどんなに言ってもこいつらは聞かないんだ。だってあたしは魔物だから。忌むべき存在だから。殺しても奴隷に

しても辱めても、何の罪悪感も抱かれない生物だから。

(家畜以下だ)

ほとんど口も開かずにおろおろとしていたルツチエを思い出して、
苦い気分になる。

?????あたしの民が。

無意識に思う。まだ見ぬ魔物。人に傷つけられる魔物と、人を傷
つける魔物。

腹の底が焼け焦げるように熱い。

「フレデリック」

初めて、あたしは少年の名を呼んだ。

微動だにしなかったフレデリックがわずかに目を揺らす。

あたしはゆっくりと手を差し出した。

「あたしを森に、連れていけ」

差し伸べたあたしの腕には、当然のように燐光の如き火の粉が渦
巻いていた。

嗚呼、我が、最愛の王。

美しき、漆黒の王者。

早く、早く、早く我がもとへ。

来れ、我が王。麗しの黒。

そうしてどうか。

どうか、どうか、どうかどうかどうかどうか。

この凝った闇を、早く?????????????

あらいながしておくれ。

『あたしを森に、連れていけ』

ルツチエはその光景を、呆然と見つめていた。吹き飛ばされた衝撃で腰は抜け尻餅をついてしまったが、立ち上がることも出来ない。身も凍るような、畏怖。

「あ、ああ……」

震えながら、ルツチエは笑う。歡喜に。

魔法が使えない、なんて。

それこそ嘘ではございませんか。

炎の燐光。輝く夜の色彩。

(????????いかなければ)

お救い申し上げなければ。

私は魔族。あの方の民。あの方の為に、出来ぬことなどあつてはならない。

???あつてはならない。かの方を想う為には。

ルツチエはお仕着せの袖を、思いつき引きちぎった。腐っても魔族。たとえ魔力を封じられようと、それくらいのことには出来る。

ちらと中を見ても、どうやら王に気を取られ、誰しも扉が崩壊したことすら気付いていないようだった。いや、あの風に、目が霞んでいるのか。どちらでも構わない。ならば今。ルツチエは睨むように、自分の腕を押さえた。

細い手首にぴったりと嵌められた銀の腕輪。幾度外したくとも、外せなかった。そんな力すらなかったのも事実だが、この悪夢から、逃れる気力がなかったのも事実。同朋を殺され、それでも逃げよう

と、必死になることすらしなかった。

腕輪を握りしめ、きつく瞼を閉じる。そうだ、出来る。だって覚えてる。身体が口が頭が。さっきだって唱えられたのだ。出来なくてはならないのだ。

「?????ツ」

キーン、と頭を揺さぶられるような激痛が奔る。ガンガンする。身体中から汗が吹き出て、膝から力が抜ける。目眩がした。視界が霞み、嫌な記憶が蘇る。苦痛すら知覚出来なくなるほどの、壮絶な拷問。火で灼かれなぶられ口に火かき棒を押し込められ舌に焼き印を、押した上に描かれた。血が硬く凝るまで鞭打たれ獣の餌になりかけた。かと思えば水攻めにされ、溺れ意識を失い解放されれば踏みつけにされる。その繰り返し。魔族というのは大概頑丈で、頑丈故に死にことすら容易でない。半端な攻撃では生殺しだ。そう、人間は、あの者らは、分かっているからこそ死なない程度に、???もう反抗する気力も起きぬほどの恐怖を植え付けて生かす。なんて屈辱。如何ほどの魔族がその餌食と相成ったか。考えるだけで憎悪に目が眩むのに、逃げる勇氣も自害する力も沸かなかつた。情けなくて情けなくて。痛みも相まって涙が溢れた。痛い。腹の奥を虫に食われるようだ。だけど。

「????ツ、あ?????」

ギーン! ???と、一際強く、脳がすり切れるような痛みに関われる。

だがそれと同時に、銀の腕輪は、忌々しき拝神術の枷は、完膚無き様で崩れ落ちた。

がくん、と膝をつく。こびりついた鉄粉を払うように手首を振るう。言い争う室内へ、ルツチエは一步、踏み出した。

その、時。

誰か懐かしい声に、もう忘れ去られた名前を呼ばれた気がした。

少年は黙っている。今にも飛びかかってきそうな術者達を意外にも王様が制して、隠者のカードみたいな怪しい格好をしていた男がフレデリックの傍に寄った。窺いみるように奴はフレデリックを、腰を屈めて重々しい様で覗きこんだけど、やっぱり少年は黙っている。黙考、という言葉が浮かんだ。そういえば、昔漢字のテストで毎回間違えていた気がする。……思い出したくない黒歴史。

ふと、少年の深く赤みの強い銀の瞳が、あたしを射抜いた。

「誓うか」

「……はあ？」

「おまえが彼らの安穩を脅かしたのではないと、誓えるか」

「?????誰に向かって言ってるの？」

当たり前だろうが。

たとえ信じられなくとも。安穩と、直截的な死と隣り合わせなん

かありえない、真綿に包まれるような国で、普通に、ごくごくごくごく普通に暮らしていた、補導にさえ怯える女子高生が、そんなことするか！

つい冷やかな口調になったけど、少年はそれでも懲りずに繰り返す。

「誓え得るか」

「……??? 誓う、誓わないもない。そもそもそんな状況に陥る可能性がない。だけど誓って欲しいというなら」

誓って欲しいというなら。

ふっ??とあたしは微笑った。傲然と、獯猛に、獣の如く。望むのなら与えよう。願うのなら叶えよう。

代わりに我が声を聞くがいい。

「誓ってあげるよ、王子殿下？」

フレデリックはまた沈黙した。それから、鮮やかに笑う。

……え、は？

(わ、わらっ???)

笑った?!

あんつなになずっと無表情だった男が、普通に、笑った!!

美形だからこそそのままゆさだ。なんというかリアルに惱殺笑顔の少年っているんだなあ。……あれ、なんだろう、ここは惱殺されなきやいけない場面の筈なのになんか異様にむかつく。くっ、おまえの美貌寄せ!

(うんああそうだ美形過ぎる美少年って女子の敵。女子の敵ッ! こそおあんな美形だったら!)

完全にひがみだけど気にしない。女は美少女じゃない美人をひがんでもいいんだ！ だって女の子だから！

全く意味の通らない主張を心中でしていると、不意に指先が痺れた。

(うっ?!)

目を剥く。

数回しばたたき、ひたとフレデリックを見据える。視線が合う。あたしは目を逸らさなかつたし、フレデリックも逸らさなかつた。もう微笑みの影すらない眼差しが、真っすぐに向けられる。

「ならば連れてゆこう。そして真なる悪しき者を捕らえよ」

まるで部下に対するような言い草だ。だが、寸前の言葉に大きく目を見張らせる。連れてゆこう、と。

少年は言った。たった、今。確かに。

迷いなく。

「ほん?????」

「正気でございますか、殿下！」

「閣下、お考えなおしてください！」

「このような恐ろしい魔物を野に放つなど、正気の沙汰では??」

うわ、言われてるよー。

喧々囂々とはこのことか。ものすごい勢いで男達が少年に詰め寄った。筆頭はアレクシスとか言われていた赤髪ターバン男。

あんまり煩いからあたしはちよっとくいつと片耳を塞いだ。

てか、閣下とか殿下とか、呼び名多くてややこしいんだけど。何で閣下。王子って閣下とも呼ばれるんだっけ? でも殿下だけでも良い気がするけど。

は「、とため息をつきそうになる。どうでもいいなそんなこと。それより、とまとも押し黙ったフレデリックに目を向け。あたしはぎよっとした。

「殿下、聞いて??」

「黙れ」

……………し??????ん、室内が静まり返った。あたしもつい、炎と風を停止させた。

こいつこそ人殺し犯なんじゃないかってほどの凶悪な顔で吐き出された言葉は、吹雪くような??とというか吹雪すら凍るような地獄の底から這うかの如き声だった。ていうか吹雪いた。今絶対空気凍った。

(……………こっわ…………)

かつん、と少年の装飾過多なブーツの底が、大理石を叩く。

「これには術でもかけておけばいい。もしこのもの言うように他に住人に危害を加える民がいるのだとすれば、放っておくわけにもいくまい。これ以上被害が出た時の責任など、誰にもとれはしまい。間違えました、では済まない。そもそもこれほどの力を持つ魔物をおまえたちはどうすると言う? 捕らえることなど出来ようものか。傷一つ与えられなかったおまえたちに、何が出来ると言う。??? ?その頭は飾りか、愚か者どもが」

怒られているわけじゃないあたしでさえ胃が寒くなるような冷たさで吐き捨てる。

……めちゃくちゃ怖い。

普段怒らない人がキレると怖いって、本当なんだなああたしは
遠い目になった。

……で、いつ出掛けられるんだ。

14 傲然と嗤え（後書き）

少年キレる、の巻。苛々の限界だった模様です。
ルツチエの受けた拷問は筆舌にし難いほど壮絶です。たぶん。

1 はじめてのおでかけです

そうして気付けば再び馬車の中にて目隠しされて収容中。

……っておい。

「ちょっと待てコラそこの馬鹿王子こっち向け！」

「……どこを向いて言っている。こっちだこっち。??なんだ？」

ぐりつ、と頬を掴んで向きを変えられる。ぐお。こ、こいつ、絶対モテない。どんなに顔が良くても女の子の扱いが下手じゃすぐに棄てられるんだかな！

「なんだ、じゃない！ 何でまた目隠し?! なんかしかも腕縛られてるし！ ありえないんだけど！」

「……おまえ、立場を分かってるのか？」

「わあかってるよ！ てかそれあたしの台詞だから！ 何言ってるの?!」

「……言語能力の差異か？」

「うっわ何それむかつく！ ストレートに馬鹿って言われた方が良いんだけどこの馬鹿王子！」

本気で思索するような口調がさらに腹立たしい。分かってないのはそっちの方だ。

目隠しされたまま、気持ちぎろつと睨みつける。気持ち、だけど。

「あたし、あんたのこと、簡単に燃やせるんだけど」

「????? ああ、そうだな」

「なら何で一緒に馬車に乗ってるの。ていうか、こんな拘束無意味

だって、分かってんじゃないの？」

苛ついているから馬鹿馬鹿とそれこそ馬鹿の一つ覚えのような語彙の少なさを露頭する罵倒文句を吐いちゃってるけど、そんなにこの王子が馬鹿だとは、本当は思ってる。別に賢くもないかもしれないけど、迷走気味な外で殺気漲らせている男達よりはよっぽど冷静で、あたしという魔物を分かっているんだろう。それだけじゃなく、きつと、踏み外してはならないことも。

そんな奴が、あたしが言ったことに気付いていない訳がない。ならば何故だ。何故にあたしの傍に座る。

「……………うちの国は裕福ではない」

「……………は？」

なにそれ。

ぼつり、と数秒の沈黙を経て零されたそれはどうにもアホ臭い。なんか、レンタカー借りるんにも金があるんだよチクショー！一台中で我慢しろや！と涙目で怒鳴っている大家族の親父さんのような発言だ。……………いやいやまさか。

頬が引きつるのを自覚しながら、一応聞いてみる。頼むから違うって言うってくれ。

「お金ないから経費削減の為に馬車ひとつ、ってこと？」
「その通りだ」

違つて言つてよ！

「え、ええええ」

なにそれ。何その貧乏なんです文句あつか、みたいな言葉は！
あんた王子じゃないのか！ 絢爛豪華できらきらしいマリア像を愛
でてる美声の男の息子じゃないのか！ 何だそれ阿呆か！

「……そもそも、歓迎された討伐ではない」

言い訳っばいんですけど。

白けた気分で聞きながら、だけど、ああなるほど、と納得する。

誰もが、あたしを犯人と思っている。

誰もが、あたしを退治して終わりにしてしまえばいいと思っ
ている。

誰もが、あたしとその魔物であればいいと、思っている。

それはそうだ。その方が、何倍も楽だろう。少女の姿をした、見
たところ簡単に始末してしまえるような魔物を一匹、殺せばいいの
だ。なんて簡単。なんて分かりやすい一件落着。

だけどこの少年が一喝した。取り返しのつかないことにはするな
と。

だから、あたしはまだ殺されずにここにいます。まだ、人殺し未遂
の容疑は晴れていないけれど、晴らす希望は持てる。

（感謝、するべきかなあ……）

だけど彼らに恨みがないと言えば、それは嘘だし。それとこれは
別かもしれないけれど、完全に分けて考えられるほどあたしは利口
でも大人でもない。未だに苛立ちを燻っているし、そもそもこの男
の勘違いでこんなことになったんだと、思わないでもない。

(……楽、楽、ね)

あたしが魔物だったら、晴れてそのなんとかという地方の人達も一安心だろう。だけど、あたしは違う。それは絶対にあり得ないことだから。

……ここで。ここで、あたしがただ逃げたら、きつと見殺しになってしまう。それは、なんとというか、酷く寝覚めが悪い。胃の辺りがむずむずする。だから。

だから、早く、その魔物を見つけなきゃいけない。たぶん。

(……あーあ)

なんか、と揺れる馬車の木壁にもたれかかる。ごっつ、と微妙な音が立った。
なんか。

自信、ないな。

色んなことに、自信がない。自分の言葉にも、指にも、頭にも。いつでもあっていた、なんてことある筈ないけど、それでも酷く、己という存在が不安だ。いや、というよりも不安定だ。

この世界におけるあたしが、あたしには理解出来ない。怒ってる時は、まるで何も迷わないのに、こうやって冷静に、気持ちを鎮めればふと疑問が、違和感が、性懲りなく押し寄せてくる。

あたし。

あたし、あの時、本気で殺そうと、した。

あの意味分かんない火で。

躊躇なく、殺そうと、したんだ。

膝に頭を寄せる。きつく、抱きしめるみたいにその膝を抱える。何それ。

(あたし、充分殺人未遂じゃん)

何で。

訳が分からない。どうしてあたしはあんなに偉そうに、傲然と、怒ったんだろう。死にたくない。それはそうだ。今だって殺されてなんかやるもんだ、って思ってる。でも。

でも、ああ、違和感、が。

拭えない。

あれは誰。

本当に?????

「おい」

冷水を浴びすような声が降ってきた。

はっと顔を上げる。見えない。けど、多分気難し気な少年が、さらに気難しそうに眉根を寄せていた。……皺、浮き彫りになってんですけど。光の具合でそれだけ微妙に判別ついた。

「え、何」

「どうした」

「は？」

「……酔った、のか？」

はい？

一瞬本気で分からなかった。え、酔ったって、酒？ 呑んでないよ未成年だから。

(????っていや違う。えーとつまり、)

車酔い、の話か？

一気に脱力した。本当なんなんだこの王子。意味分かんないよ。

魔物にそんなこと尋ねるか普通。てか魔物って、酔うとか酔わないとか、あるわけ？

「酔ってない」

「じゃあどうした」

「いやどうもしてないけど」

「ちょっと伏せてただけでしょ。」

怪訝に即答すると、フレデリックのばつが悪そうに身じろぐ気配がした。

「……具合が、悪そうだった」

瞬く。

「ぱちぱちと、ひどく緩慢に、あたしは瞬きました。目隠しの内側で。具合。」

「悪そうに、見えた、のか。」

（……そんな、心配）

そんな、ごくごく普通の心配を、こんなところでしてもらえとは思わなかった。そんなに普通に、案じてもらえる、なんて。思いもしなかった。

「がたん、と大きく車輪が軋んで馬車が揺れる。」

狭い中で、フレデリックの身体が、近づいた。熱が。じわりと空気を震撼させる。

ふつと額に何か柔らかいものが当たる。数秒それはこそばゆい感触をあたしに与えて、するりと離れていった。

「……？」

「熱はない。……魔物特有の、何かか？」

……この王子は未だにあたしの具合が悪いと思っているらしい。
だから何ともないって言うてるでしょうが。

「だいじょーぶだから。ちょい離れて。なんか熱気くる」
「……、おまえは」

ふう、とフレデリックのため息が耳の横をくすぐる。う。なんだ
これなんか恥ずかしい。

「もう少し可愛げっていうか、捕虜らしさを出せないの?」

ひとり変な気分になっていたら、そんな聞き捨てならない発言が
飛んできた。

フレデリック、じゃない。
これは。

聞き覚えがあるようなないような声に首を傾げ、?????電撃が
直走るかの衝撃が駆け抜けた。

耳元をくすぐる、ぞっとするほど艶やかな声。甘い吐息。鼻孔を
つく、奇妙な匂い。……なんか、インド土産とか、そういうののお
香みたい、な。

女のあたしでさえどくりとするその妖艶な空気。

すぐ、傍に、誰かがいる。

それもなんかこうオトコというオトコを軒並み骨抜きにしちやい
そうなすんごいお姉さんが!

緊張に口も聞けずに内心大いに狼狽える。うっわ誰これ。こわい。

なんか普通と違う意味で怖い！

(ヘルプ！ ヘルプミーフレデリック！)

「……ベルヴェエラ、それは恐らく女だぞ」

そんなあたしの心の叫びというか訴えというか命が聞こえたのか、少年が疲労の色濃く香る口調でこの誰かを諫めてくれた。……ちよつと待て。恐らくってなんだ恐らくって。正真正銘女でしょうが。抗議しようとして口を開いて、だけどまたも甘い艶やかな声に遮られる。

「ああ、残念。誑かして骨抜きにして、それから盛大に裏切つてやりたかったのに。ふ、うふ。女の子じゃあ詰まりませんわね」

ええええええ。

な、何その超悪女な発言！ ていうか本当に骨抜きにしようとしてたの？！ こ、こわー！

あたしは真剣に青ざめた。だけどフレデリックは殊更に冷ややかな声で続ける。

「……嘘をつけ」

「はあい？」

「分かっていたらどう、それが女と」

あ、マジ？

じゃあ何であんなこと言ったんだ見知らぬお姉さん。脅しですか。

「????? いやだわ、殿下。少々、確かめさせていただけですのよ。ふふ、確かに、これは女」

つ、と首筋に仄かに熱を孕んだ、けれど圧倒的に冷たい何かに触れる。???つ、め？

そう思った瞬間、微かな痛みがその触れられている場所を焼いた。ぎり、と皮膚、を。

(裂か、れた?)

未だに首筋が熱い。痛みでじんわりする。呻きもしなかったあたしはめちやくちや偉いと思う。

「詰まらない。詰まらないわ。あなたの心を、ぐちゃぐちゃにしてやりたいのに」

その卑しい身体を傷つけられないなら。

耳朶のすぐ横に落とされた眩きは、吹き出た汗も凍るほど、冷たかった。

*

彼女は暗く、木々が重なり合うようにして覆い茂る森の中にふつとその姿を下ろした。

木の根をかきわけ、奥に入っていく。キィキィという吸血生物の鳴き声や、鳥が頻りと羽を鳴らす音、呻き声、断末魔の如き叫び。それらをことごとく聞かなかったことにしてずんずん進む。

やがて鬱蒼とした葉の色がほんのりと光を抱く。わずかに開けた場まで出て、漸く人心地ついた。

整備されていない、土と石で作られたごくごく自然の道を足音立てずに歩き、きよるきよると辺りを見回す。静かだが、よく耳を澄ませば彼女の尋常ではない聴覚に無邪気な笑い声や囁き声が届いてきた。

それを聞いて、彼女はやっと強ばっていた表情を緩めたのだった。

1 はじめてのおでかけです（後書き）

はたして王都より離れ。
二章、です。

登場人物整理 4

ベルヴェラ

ファミリーネームは出てきてないので省略します。

妖艶。兎に角妖艶。気性が激しいお方です。

色々あって、魔物嫌い。王様付きですが、今は臨時で王子について
ます。

年齢 ??

2 疾走、憤慨、驚愕

絹を裂くような悲鳴、とは多分こういうのを言うんだろう。

青ざめたまま硬直していたあたしは、馬車の外から、??多分そう遠くないところから届いた悲鳴にびくりと震えた。目隠しの中で激しく瞬き、限界まで目を剥く。耳がびりびりした。ドクドクと心臓が脈を打つ。もう、首筋の痛みは気にならない。

行かなきゃ。

今の、声のところまで。早く。手遅れになる前に、行かなきゃ。

「……ベルヴェエラ、今のは?????」

「少年、出口はどっち?!」

少年が女性に向けた問いを遮って、あたしは叫ぶように訊いた。手首に巻かれていた布をおかしいほどの馬鹿力で破り、不安定な馬車の中で立ち上がる。ぐらり、と足下が揺れた。馬が暴れるような声を出す。ひどく耳障りなそれにかき消されそうな悲鳴をなんとか聴力を総動員させて捉え、あたしは手探りで少年の肩を掴んだ。

「なん、」

「出口は、どっちかって訊いてる! ??早く、行かなきゃ!」

がたがたと少年の肩を揺らすと一瞬の沈黙をおいて、視界が開けた。眩しい。だけど実際は薄暗い馬車の内部が割合正確に見える。

「え……」

目隠しをとられた。

まだ微妙にもやもやする目を凝らして、少年の仏頂面を凝視する。すると想像通り、世にも美しく艶やかな、たつぷりした褐色の髪を長く伸ばし、緩やかに巻いている女の人がきつくあたしの手首を握りしめた。い、ったい。呻きかけて、だけど何故かフレデリックが彼女を目で制した。そのおかげで拘束は僅かに緩まる。僅かに。

とはいえ、少年があたしに味方???って言っているのかどうか分かんないけど???してくれたのは確かだ。

ますます訳が分からず怪訝にフレデリック王子を睨む。

「言っておくが」

仏頂面を髪の毛一筋ほども動かさず、不機嫌極まりない口調で。

「俺の名前は少年じゃない。一度聞いて、覚えがあるならきちんと発音しろ。覚えてないなら聞けばいい。とにかく少年はやめろ、この、阿呆が」

言っつて、とん、とあたしの背中を押した。平手で。不意を突かれてあたしは馬車から転げ落ちそうになり、女の人は驚愕したような表情でうっかり手を滑らせた。

「な、???」

抗議しようとして、間近に迫った草に息を呑み、慌てて手をつく。振り向くと、少年は???フレデリックは、やっぱり顔色一つ変えずに不機嫌そうだった。

あたしはぼけらつとしてから、くっ、と引きつるように笑った。

「うん、覚えてるよ。フレデリック」

お礼は言わなかった。鬼の形相で服の袖から何やらざらりと生々しく輝くものを走らせるベルヴェラさんとやらに冷や汗をかきつつ、悲鳴の続く方向へと一目散に走り出す。??僅か、数分もしない、間だ。まるで無駄に時を過ごしたようなのに。

馬車の外に居た兵達はもうとつくに声のする方に行ってしまったらしい。随分不用心なことに、まさにもぬけの殻。ってこういう場合じゃ使わないか。それにしても貧乏国だったって、こんな緩くていいのか。あんなすんごい拷問部屋はあるのに。そんなことをちらりと考えて、すぐかぶりを振る。折角フレデリックが出してくれたんだから、どうでもいいこと考えてる暇なんてない。

冷たい視線が背中に貼り付く。それは、非常に機嫌の悪そうな、疲れたような色をしていた。

??うん、お礼は言わない。だって何だかすっごく癩じゃないか。

*

「殿下！ 正気ですか?!」

耳にきんと響く声に、彼は思いつ切り眉をしかめた。

「ベルヴェラ、もうちょっと声を……」

「あんな、あんな魔物なんかを??何故!」

「……喧しい」

人の話を聞いていない。

はぁ、と軽くため息をつく。頭痛がしてきた。まるで狂乱するように、そのかんばせへ憎悪を浮かべる部下の気持ち分からない訳ではない。彼とてそうそう魔物を野放しになど出来ない。たとえ正論を吐き、まるでちよつと力を加えれば折れてしまいそうだと錯覚する、少女の姿をしていようとも、彼女は紛うことなく魔物であり、桁外れの魔力で、彼らを脅したのだ。??いや、そも個など関係ないのである。ベルヴェラやアレクシス達にとって、魔物というだけで憎悪すべき対象なのだ。蔑むべき、辱めるべき、駆逐すべき、おぞましい生物。

??だが。

だが、と、それでも彼は思うのだ。

一国の後継が抱くべからざる懷疑だ。けれどどうしてもあの激昂する眼差しに動揺する。僅かなーほんの僅かな、罪悪感のようなものが胸中で疼く。

そして彼につめよつたあの魔物は、ひどく切迫した声で、様子で、悲鳴の主を案じていたのだ。

己の状況すら葬って、肩を揺らされるなど珍しいものを施し、叫んだ彼女を間違っているなどと言えようか。

(……まあ、疑わしいのは確かだ)

額を覆い、無造作に上着を羽織り、立ち上がる。未だ何やかやと喚き立てているベルヴェラをちらりと一瞥して、

「行くぞ」

「は?!」

フレデリックはひらりと馬車から飛び降りた。

その馬車の背後で、気配を消した影が青ざめながら唇を噛んだことも知らず。

*

走り難い、当たり前だけど塗装されていない地面を駆けて、慎重に耳を澄ます。??ん、こっち。ぐつと拳を握りしめて、あたしはバクバクいう心臓を無視した。怖くない怖くない。この前までに比べれば、ぜんっぜん怖くない。怖くないんだってば!

言い訳なんてまったく効かないけど、どうにか気は紛れる。

ふと、視線の先に民家のようなものが見えた。赤茶色の屋根が渋い。そういえば良い天気だなあ、とうっかり思ってから、あたしははつと速度を上げた。いやいやいやそんなこと考えてる場合じゃないし！

（あーもう苛々するなあ。苺牛乳、苺牛乳！ 似たようなのでいいからこちで売ってないかなー）

キキイツ、靴を滑らせて急停止。腰を少々低くして、あたしはがっつと飛んだ。丁度家と森の境目。を、飛び越える。

段々畑が遠目に見えて、あんまりにもどかな風景に拍子抜けしそつになる。……あれ？ 気付けば悲鳴は止んでいたし、兵達の姿も見えない。

（あ、あれ？）

まさか道間違えた？！

（うっそ何それありえない。ここまで頑張って走って耳めっちゃくちゃ澄ましてきたのに何でっ?!）

がーん、と衝撃を受けてからおろおろと周囲を見回す。何もなし。そんな。

早く引き返そうと、背を返し、?????

「…………え？」

赤い色を赤茶色の屋根の家の奥に見つけて、あたしはもう一度、振り返った。

さつき以上に心臓が暴れ回る。膝が笑いそうになるのを堪えて、その色がかすめた奥まで走る。??木々に隠れて見えなかったそこ

には、多分あたし達についていた兵達が倒れていた。

なんていえばいいのかわからない。

阿鼻叫喚、つていうのは多分違う。ただ、鉄錆みたいな匂いが鼻をついて、酷く不快だった。気持ち悪いくらい、の。匂い。

知らず引きかけた足を、か細い呻き声が止める。あたしは慌てて兵達の間を通り抜けた。

「……………う、……………あ……………っ」

苦し気なそれを嘲笑う、耳障りな声が轟いた。

(……………なに、こ???れ)

裂けているんじゃないのと聞きたくなる細長い口。後ろ側に引かれた耳からはどろりとした黒い液体が流れている。全身を覆う体毛には、一体誰のものなのか判別もつかないような返り血。

巨大な狐が妖怪になったみたいだ。

(これ、つまり……………ま、もの?)

これが?

これが、近頃人を襲っている魔物?

?????あたしの民?

ぞつ???とそら寒くなった。肝が冷えたみたいに。だけどふつつと頭には血が上る。こみあげてくるのは強烈な吐き気だ。

ああ。

ああ、ああ、ああ。

姿形なんて大したことじゃない。

そうだ。

それならばあの山羊頭の方がずっと変わってる。

がり、と痺れるくらい、唇を噛み締める。……鉄の味が、する。

鉄なんて食べたことないけど。鼻先から消えない臭気と、同じ。

「?????おまえは何を、やってるの」

血塗れの獣は、美しかったろう髪を乱した女性の首を、掴み上げていた。

鋭い爪の、先で。

*

かやぶき屋根の家を通り過ぎ、さくさくと草地を踏めば、必ずと

言っていいほど、賑やかな声が彼女を迎える。柔らかかでどこか嬉し
気なそれは、どれを取つても彼女の帰還を喜んでくれていた。思わ
ずといつていで頬を緩め、そつと笑みを返す。そうするとさらに
声は嬉し気になり、よつていかないと誘つてくる。彼女は申し訳
なく思いながら、今度お邪魔させてくれといつたことを口に上らせ
断りつつ、草地から離れて小川のせせらぎが心地よく耳に届く、小
石の多い道へ急ぐ。その道すがらさえ、彼女を迎える声は止まない。
その相変わらずの穏やかな空気にほつとして、彼女はさらに足を
早めた。

再び森が深くなつてきたあたりで歩みを止め、ゆうらりと手をか
ざす。すると冷たい石の感觸がして、次の瞬間には地味が過ぎる城
塞が目前へ現れた。

否、現れたというより、見えるようになつたというべきか。

ともかく、彼女はその石壁を伝うようにして、城の中へと入つて
いったのだつた。

3 単細胞には拳を一発

沸騰しそうだ。

「おまえは、何を、やっているの」

一音一音区切るようにして、あたしはもう一度問うた。ぴくりと長い耳が動き、醜悪な顔があたしを振り返る。女性を放しはしない。いかにもな風情の“魔物”は、ニタアと嫌な感じに笑った。その拍子に裂けんばかりにでかでかしい口の端から唾液が零れた。あたしは思わず眉をしかめる。

血の匂いに紛れて、何か焦げ臭い匂いもが鼻孔を突いた。そつと視線を走らせると、そこかしこに焼け焦げたような痕が残っている。というか、灼け落ちて瓦礫となって散らばっている。

「……なんだあ、小娘。??ん？」

ニタニタと笑んだまま、ふとそいつは毛深い肩に右頬を埋めた。人間に変換したところ、首を傾げたみたいなきらびる感じがするだろうか。

あたしは、とにかく、あの時のように激昂しないことに努めた。努めたつたら努めた。ぎりぎり奥歯が勝手に鳴ってたけど無視した。

暫く唸っていた魔物だけど、漸く何か得心がいったのか、ああと軽く頷く。

「おまえ、魔物か」

「……」

あたしは憮然とした。魔物。多分、そうなんだろう。うん。そう
だ。あたしは、魔物、だ。?????はなはだ遺憾なことに。
魔物。

腹の中でその言葉を繰り返すたびに、すうっとそこが冷えていく。
どう言えばいいのかわからない、いいやどうしようもないって言っ
た方が良くもいけない、胸底の悪さ。

ふう、と息を吸って、吐き出す。

「だから？」

女性はあたし達の会話なんてもう聞こえていないようだった。じ
りじりと、焦燥感に焼かれる。ああ、もう、苛々する。これがただ
の喧嘩なら、靴ぶん投げて走って蹴って連れて逃げるのに！

「ははっ、なんだ、おまえもこの女を食べたいのか？ 悪いな、こ
いつあ俺んだ。そこらに転がってんのならやってもいいぜ。不味そ
うなのばっかだな」

だがこいつあ上玉だ。何しろ腹ん中にガキもいる。

きひひひっ、と甲高く笑い、そう言う、魔物の、声が。

(?????????はあ?)

ああ、気持ち悪くて、仕方ない。

「何言ってるの？」

「あん？」

「黙れこのゴミクズが。その薄汚い口を閉じるクズ。気持ち悪いん
だよこのクズ」

ぺっ、と唾を吐き捨てて、あたしは罵倒した。

こんな風に口汚く罵るのは久しぶりだったから、あんまりキレが
よくないな、と頭を掻く。死屍累々な人々を踏まないように気をつ
けながら、じやり、と土を踏みにじるようにして、近づいた。

一歩。

どうやら罵倒されることは少なかったらしい魔物は、一時じゃな
いくらいの一時停止から復活し、もとから吊り気味の目を吊り上げ
た。はん。おまえはどこぞのキレやすいお坊ちゃんか。

「な、??んだってえ？ おまえ、俺様を誰だと思ってたんだあ？」
「知らつねえよ。語尾伸ばすなキモいウザい落ちろこのドクズ。お
まえ、そのでかい耳は飾りなわけ？ 黙れつつただるカス。あー、
何でこんなテンプレな罵り方しなきゃなんないかなーもうむずむず
する」

てかこいつの台詞がテンプレなんだ。そうだそのせいだあーむか
つく。ぐしゃぐしゃと頭をかき混ぜて一回しゃがみ込んで、もう一
回立ってぶんぶんと雀の巣になった頭を振る。

?????とにかく、こういうのは、ひとつのことしか考えられな
いまさに単細胞だから。

あたしは自分のことを棚に上げてそう評し、ぐっと拳を握りしめ
る。

ぶるぶる地味に気味悪く震え出した魔物に、あたしは傲然と笑ん
でみせた。

魔物なら、大人しくあたしにへりくだれ。

「いいからとつとその人放しな」

獰猛に吠えた魔物の口から赤い光が弾けた。

*

ベルヴェラ・フリンギルは今直ぐ敬愛するフレデリック殿下を絞め殺しそうな気分だった。

スタスタと前をいく王子の後を苛々しながら追う。

どうして。

どうしてあんな魔物を野放しにするのだ。

逃げた先で、あれが、いつ、民を貪り、辱め、暴力を振るうのか。分かったものじゃない。ああ。

ああ、憎い。

憎らしい。

どうして、あの時殺してしまわなかったの。

「?????殿下」

「なんだ」

変わらず涼やかな声。

ぎり、とベルヴェエラは血が滲むほど唇を噛み締めた。

「殿下、よろしいかしら」

「なんだ」

「あの魔物を捕まえたなら、今度こそ私が殺してもよろしくって?」
「……何でそうなる」

漸く振り返ったフレデリックはいかにも疲れたような表情をしていた。うふ、とベルヴェエラは微笑う。そう。この父王の千万分もの苦労を背負ったような、リーフィエの騎士貧乏くじを引いたような少年こそが、フレデリックだ。

あんな、魔物を心配するような余裕ぶりなんて、似合わない。

「嫌ですわ、殿下。当然でしょう。魔物なんて唾棄すべき存在ですわ。違くて?」

「……??全てが、か?」

妖艶に笑む彼女に、フレデリックは眇めた眼で問うてきた。ふふ、と彼女はまた笑う。何を、今更。そんな当然のこと。

「ええ。全てが」

くすくす、と笑いがこみ上げて来る口許を艶やかに扇で隠し、長い黒髪をつねらせる。高い木々の狭間から覗く空は青い。ざく、と

草地を踏みしめれば、土の匂いがする。獣の息遣いも。

「??ふと、ベルヴェエラは眉をひそめた。

何か、奇妙な気配がしたのだ。訝しく思っただけを窺う。が、何も見受けられない。気のせいかと首を戻すと、フレデリックがちいさく「そうか」と呟いた。

「ならば、俺はもう止めはしまい。好きにしろ」

そうして、勝手に見極めるが良い、と。

そう、続けた。

彼女は意味が分からなかった。

見極めるも何も、あれは魔物だ。そんなことをする必要が、どこにあるのだ。最期の一鳴きを上げる前に、くびり殺してしまえば良い。

そもそも、いつからこの王子はあの魔物に甘くなったのだろうか。
(まさか殿下がたぶらかされる、なんて。ありえないわ)

そう、あり得ない。彼は、あのぬるま湯に浸かっているような王侯貴族達の中で、最も現実的で、かつ現まっに面ましている。ただ美しいだけの魔物に、ほだされてしまうような可愛げなどない筈だ。

「……殿下、何故、」

「！ 口を閉じる。悲鳴が上がったのは、あの屋根の家か？」

手で制されて、つい口を嚙む。そういえば、その為に向かっていたのだ。馬車を降りてまで。……魔物を追う、為ではなく。

そこまで考えて彼女はふと疑問を抱いた。

……それならば、こんなのにのんびり向かっていたらまずいのではなからうか。恐らく兵達も行っているのだから、少しでも助けは必要であることに。

「……ええ、多分そうでしょうね。ではもっと早く行った方がよろしいんじゃないかと?」

「いや、……まあ、そうだな」

……何かしら今の間は。

しかも“いや”って言ったのだけど。

ベルヴェエラは冷ややかに眦を吊り上げた。一体、どうしたというのか。

「殿下、はつきりなさらない言い様では御夫人方に好まれませ???
??」

言いかけた時、ひゅつと彼女達の脇を何かか駆けていった。

一瞬呆然としてしまい、瞬きもせずとその背を追う。

小女のようにだった。

ふわりと広がるエプロンドレス??あの服は、城の奴隷?!

思わずぎよつとしてフレデリックを見やれば、彼も驚いたように目を見開いている。

「……………ルツチエ?」

風に溶けるような声だった。

「あら、やっぱり城の奴隷なのですね?」

「ああ、というより、俺についている者だ。何故ここに……………」

「あの魔物を追ってきたのではなくて? 久しぶりの同族に、愚かな期待でも抱いたのかしら」

「……………、とりあえず、追っぞ」

はあ、と疲れた顔の王子に、はあいと鼻にかかった声で返事して、ベルヴェエラはざらりと長い髪を一梳きした。

*

うん、やっぱり単細胞は怒らせて気を逸らす、だな。

まさかの炎攻撃に心臓を跳ね上がらせながら、あたしは体勢を低くして魔物の傍まで駆けた。ひゅん、と風を切る音がする。

気付けばあたしは魔物の肩まで上っていて、本能的に毛深い腕に手刀を落とそうとするとそこらだった。あたしは何も考えず、そのまま勢いよくその腕を打つ。びいんと打ち付けたところが微かに痛んだが気にしない。不意を突かれたらしい魔物はずるりと女性を落とした。あたしはその隙に女性をしっかと掴んで魔物の後方へと飛び

退く。

彼女を庇うようにして背にし、ぐつと腰を下ろして息を整える。もともとそれほど乱れはしなかったが、一息突くことは大事だ。と思う。

避け切れなかったらしい髪の毛一本がちょっと焦げている。うわー、何これ。髪の毛って本当に焦げるんだ。すごい嫌だ。くそう、オトメの髪になんてことを。許すまじ。

「……………うぐるるるる……………」

う。

なんか、その恰好でその呻き声は、ちょっとマッチし過ぎて怖気がするんですけど。

そんな感じに萎えているあたしに向かって、魔物はまたもや火を吹いた。ガア！ と正しくRPGな鳴き声と一緒に。

とん、と軽く地を蹴る。

それだけで屋根の上くらいまで、跳ね上がる。なんだか昔観た魔法小女みたいで、微妙な気分になった。と、そんな気分になっている間に、魔物はあたしがいる方へと上向いて火を寄越す。意外にも戦闘本能はイイ線いつてるらしい。

げっと思いつつも仰け反って、そのまま降りる。一体全体あたしの身体はどうなってんのか、あんな高いところから落ちてても草一風きもしない。化けもんか。

(???)ああ)

化け物だ。

だって。

だって、あたしは魔王だから。

4 携帯電話はありません

たん、と軽やかに飛び退いた瞬間、よりにもよってあのくそばか
獣野郎は気を失った女性に向かって火を噴いた。

「ばっ???ありえねえ!」

胃の底らへんがざあつと冷たくなる。徒競走じゃ大体三番目か六
番目だったあたしは、後々考えると自分でも吃驚な速さで駆けて、
コンマ何秒かの間にヤツに飛び蹴りした。若干火の方向が逸れて、
よく茂った木々が灼かれる。それが酷く気に障った。だけどとりあ
えず彼女は無事だったようで、あたしはほつと息をついた。だーも
う本ツ当男の風上にも置けないヤツだな。さいてーださいてー。あ
りえん。それにしても、何だこの運動能力。RPG的な扶助能力つ
ばい感じか? なんか今ならシャイニングウイザードとか出来る気
がする。

(……っつていやいや、そんな場合じゃないか)
うん。
どうしよう。

ふーっ、とあたしこそ獣みたいに荒く息を吐いて威嚇する。そう
しながらちらりと女性の気配を探る。まだ気絶したまま。まあ、起
きていない方が、多分良いんだろう。

しっかし。
(……困った)

炎、とか。どうやって出せばいいか、分かんないし。あの時はな
んか勝手に出ちゃってたし。でも得物とかないから、近距離で攻撃
しなきゃだし。かといって、近づいたら多分、あいつはあの女の人
を攻撃するんだろうし。

あたしはほとほと困り果てて唇をへの字にした。

大体あたしはただの高校生なんだ。そりゃ、喧嘩とか。まあ、しないことも、なかったけれども。でもこんな明らかに人外なのと戦ったことなんてないし、そもそも想定外だし。どうすればいいのかさっぱりだし。てかこういう場合って普通、ナビとかあっても良いんじゃないの？ 一人でレッツファイトとか酷くね？ お助けキヤラとか居ないわけ？！

……いや居ないだろうけどさ。今倒されて起きたら屋上、なんてことは、多分、ないんだろうしな！。

あーもう。

嫌だな。

これじゃあダダ捏ねる子供みたいだ。

「……ほんと、いい加減にしてよ」

じりじりと間合いを計っているらしい魔物は、明らかにイツチャっている。目がやばい。濁った眼がさらにぐるぐると渦巻いている。相変わらず長い耳からは、どろどろとした液体が垂れていた。忌憚なく言わせて貰うと、真面目に気持ち悪い。グロい。けどあの人がいる限り、無闇に無茶な真似は出来ない。うっかり、なんて絶対駄目だ。

どろろしよび。

冷や汗が、つうと頬を伝った。どうしよう、動けない。

ぐるぐる、とやっぱり耳障りな唸り声。

くわ、とその裂けた口が開く。

(?????うげ)

くる、と思った時には本当に熱風が押し寄せてきていた。避けようとして、いやにその火が広範囲なことにぎよっとする。????うそ

お！ まとめて一撃必殺つてやつか？！

女性は起きない。だからあたしが盾にならなきゃいけない。だから動けない。だって。

動いたら、三人、死んでしまう。

「……………」

さすがに焼死は嫌なんだけど！

ぎゅっときつく目を閉じる。多分一秒もたっていないんだろっけれど、その間とにかく恨み言が脳内を駆けずり回った。

ああもう結界とか、出せないのかあたし！

彼女は冷たい石の部屋の中でそつと跪いた。

全面灰色の積み石で造られた部屋。家具はこの内装に不釣り合いな白い木製の机のみ。窓にしても、扉から向かって正面の壁に一つしかない始末だ。それも、石壁を無理矢理くり抜いたような歪な形。そんな室内の中央にあたる位置、その地べたに手をかざす。するとゆらりと灰色の石床が靄がかり、緩やかな波紋と共に透明な水面すいめんが現れた。

これを水鏡、と彼らは呼ぶ。

『アリュースラ』

密やかに、彼女は目を伏せて呼びかけた。

一瞬の間の後、少し低めの甘やかな声が呼応する。

『おや麗しの羊爺よつやの君。如何なされた？ 何かまた問題でも起きたのですかな？ それとも私わたくしめのお喋りをご所望か。ふふふ、お望みならばいくらでもお付き合い致しますよ』

ふふふふふ、と至極楽し気な様子で言われ、彼女はつと瞼を押し上げた。愁眉を寄せ、こめかみを揉む。いつもことながら、あまりにも能天気な同朋の言い様に頭痛がした。

『……アリュースラ。よくお聞きなさい』

ひとの話を、と心の中で続ける。

『ふん？ 本当に何かあったのですか？ しかし人間と魔物の争いなんて毎日のようにあるじゃありませんか。そんな大きな事件で

も？』

……そう思ってるなら少しは諍いが少なくなるよう手を回して欲しい。どうしてこうこの男はおかしな方向に奔放なのか。否やこれは優しく言い過ぎだろう。ちやらんぼらんの方がきつと正しい。

というようなことを今まで何遍思ったことだろうか。

『……大きなことです』

『なんと。貴女がそう仰られるとは珍しい。して、その大きなこととは？』

彼女は一拍の間、沈黙した。

このお喋りな男は、しかしその実、何に対しても突き放した性格だ。およそ彼が懐深くに誰かの侵食を許したところなど見たことがない。故に彼女はそのほんの一拍、躊躇った。これを言ったところで、彼は一体いくらほど心動かされるものだろうか。ふうん、で終ってしまうかもしれない。だが。

すう、と彼女は息を吸い、その葛藤と正反対なほど自然に、告げた。

『陛下が、いらっしやいました』

そう、だが、けれども。

彼女はそれ以上にあの魂を貫いた衝撃を、信じていたから。

*

キーン、と金属が擦れるような鋭い音がしたのは、あと一歩で灼き殺されそうな時のことだった。

ぼかん、と目を瞬しばたく。

……されそう、つまり、されてないってことだ。その意味合い通りにあたしはどこも燃えずに生きている。目の前に広がる半透明な壁のおかげで。

それは、何やら触るとぶにぶにしそうな見た目だった。いや触ってはないけど。ポリエステル、とも違って、……ナタデココ、みたいな。

……いや。

いやいやいや。

なんだ、これ。

「……わつつ？」

あ、違う。ホワイ、のが合ってるのか。あれ、どうだっけ。英語ってあれ未知の言語だよな。日本人はカタカナひらがな漢字の三ヶ国語やってるんだから英語とかやらなくて良いと思うんだ！??
って違う。そうじゃない。

「陛下！」

「るっちえ……？」

そつだ。??いかん現実逃避してしまつた。

(で、出来ればルツチエにはあの人を連れて逃げて欲しいんだけどなあああ!)

どうして向かつていくんだ??!

お助けキャラには意外過ぎる相手と展開に混乱するあたしを余所に、彼女はきつ、と可愛らしい顔を怒らせて魔物を睨んだ。

「??陛下を目前にして、理解も出来ぬとは、お前はどこまで墮ちた。最早^{せほ}同朋^{ちや}とも言えぬ。……そんなにも、罪無き血を啜るとは」

低い声で、ルツチエは呟いた。押し殺すような、嘆くような声だった。不思議だ、とあたしは茫然とする。

魔物というものは、感情で言葉遣いが変わるものなのだろうか。

あたしも、ルツチエも。

そんなことを思つて、身動き出来なくなるほど、??あたしに背を向けた彼女は酷く、怒っていた。

『…………へえ』

数秒の間をおき、水鏡の向こうから軽やかな返答があった。彼女は黙る。元からそう多くない口を閉じ、続く言葉を待つ。

果たして、彼は言い捨てた。

『確かにそれは、大きいものでございますね』

くすり、と笑みを含んだ声は、随分と皮肉じみていた。

5 道化の如く一礼

不意にナタデココがたわんだ。

……いやいやナタデココじゃない。多分、これは境界つてやつだともかく、それがぐにやりとたわんで、曲がりくねり、瞬時に霧散した。ぱあん、という破裂音が耳の奥に響く。頭の中に直接流れ込むような音だ。その音と一緒に、ざあつと霧みたいなものが広がった。煙幕、みたいなの。

「……ちよ、る??ルツチエ」

暴走してる！ 暴走してるよ！

あわわわわ、と柄にもなく青くなる。遠目に見ても、猫耳がキシヤーツ、とばかりに逆立っていた。そういえばルツチエは猫耳娘なのに尻尾はない。いやどうでもいいけど。

城で会った時には想像もしなかった俊敏さでルツチエが駆ける。霧に惑っているのか、あの単細胞はぐるると苛立たし気に啼きながら、薄靄の中を頻りに見回していた。こういつちやなんだが、酔っぱらいみたいだ。

あたしはルツチエを追うことを諦めて、女性を回収した。大穴の空いた壁だったんだろう位置から躊躇いなく家だった場所に入る。焼け落ちて黒焦げの木片でいっぱいになっている中、かろうじて隠れられる場所を探す。割れた食器が散乱した、多分キッチンなんだろう一角の足が折れてテントみたいな形になってしまっているテーブルの下に、彼女をそつと横たえた。おそろおそろ、そのお腹に手を当てる。……解ら、ない。ずん、と胸が重くなった気がした。

どうか、生きていますように。

「?????ツギキイ！」

跳ねられた馬みたいな悲鳴が聞こえた。床に落ちていた、破れたテーブルクロスらしきものを女性にかけて、家の外に出る。ルツチエがエプロンを閃かせて、ひゅつと片手を滑らせるところだった。次の瞬間、ルツチエの手があったところから、無数の透明な平べったい塊が現れ、風を切りながら魔物に向かい、その身体に次々と突き刺さった。瞬く間に血飛沫が上がる。

うわあ。

(な、なんだあれ！ 手裏剣透明バージョン、みたいなやつ?)
敵ながら同情したくなる無惨なやつぶりだ。痛^いったいだろう
だなあ。?? 自業自得だけど。

まるで躊躇のないルツチエの動きは、見蕩れるくらい鮮やかだった。眇めた翠の眼が冷たい。血だらけのヤツを、何の感慨もなさそうに、むしろ蔑むように見ている。……うん、気持ちに分かる。あたしもあいつ、ぎったんめったんにのしてやりたいしなあ。

ずっと僅かに前屈みになって、滑るように走り、ルツチエは躊躇って雄叫びを上げる魔物を上から睨みつけた。

「お立ち」

……吹雪いてんじゃないのかってくらい冷めた声だった。こ、こえええ。

ルツチエ達の方へ小走りに向かう。途中、倒れている兵の幾人が血を吐きつつも呻き声を上げているのに、あたしは少なからずほつとした。……ぜんっぜん良くないけど、息があるだけ、マシ。

（すみませんごめんなさい申し訳在りません！ あとで手当てをお願いするんでもうちよい辛抱してください！）

心中本気で拝み倒し、腕やら足やら胴体やらの間を飛び抜けてルツチエに近寄る。ついと金色の髪が揺れて、その面が上がった。あたしと同じくらいの背丈の彼女が何か口を開きかけた時、がざりと草が鳴った。振り向くと森と禿げた茶色い道の境目にフレデリックとベルヴェエラさんが青い顔で？？……なんで青い顔？

？？つて、ああ、そうか。この人達、フレデリックんとこの兵だった。

あたしはとりあえず、当初の目的を指差して、

「フレデリック、捕まえたよ」

ぼかんとする少年に向かって、出来るだけ軽く言った。

で、とゆうに十数秒は停止した後、フレデリックは唸るように訊いてきた。

「どういうことだ、これは」

「だから、民家を襲ってた真犯人、捕まえたってこと。てかそれよりさー、自分の配下の心配しなよ。早く手当て。あたしみたいな素人が下手に触ったら悪化しそうな傷多いから、緊急措置でも何でもどうにかしたげて。あたしにも出来る事あつたらやるから」

ちよつと真剣な顔で言ってみせると、フレデリックはそれもそう

かとはかりにもともと険しい表情をさらに険しくした。なんと
か、陰鬱。こいつ、眉間の皺が取れる日なんてあるのか。絶対苦
性だ。

惨状に妖艶な面を青ざめ、かつ赤黒くするベルヴェラさんを顎で
促し、フレデリックは呻き声を上げる兵達の傍で膝をついた。なん
とか身体を起こそうとする一人を手で制して何事か呟く。その様子
を、息を詰めて見ていたらフレデリックの手の平から黄色を帯びた
光が溢れた。ぼうつと灯ったそれは、瞬く間に兵の全身を包んでい
く。その様子にベルヴェラさんも正気に戻った体で、アラビアの踊
り子さんみたいな衣装を揺らし、袖を閃かせて中に隠されていた金
の腕輪を鳴らす。キイン、と大きくぶつかり合う音がちよつと耳
に障った。だけど効果は絶大らしく、その腕輪から放たれた光が一
瞬で、屍の如く倒れ伏している人達を余す事なく覆った。眩しい。
む、と眼を細める。ぱちぱち瞬きした後にはふと横を見ると、ルツチ
エが大きな眼を大きく瞬か^{またた}せていた。……猫、と強烈に思った。う
ん、やつぱりルツチエは猫なんだな。

「ルツチエ、そいつどうすんの？」

「陛下の御^{あな}_{めい}錠のままに。焼くも茹^{あな}でも、なんとでも」

……それにつこり言うことじゃないよね。

ていうか、焼くも茹^{あな}でも、って、煮るのも焼くのも、ってやつ
か？ こわい、怖いよルツチエ！

ぞー、とひっそり白くなりつつ、首を振る。

「や、いやいや。とりあえず、逃げらんないように捕まえるって、
できる？」

「おやすい御用です」

そう答えた瞬間ルツチエはガッ！ と魔物の二の腕を捻り上げた。

鮮やかに、片眼鏡モノクルの向こうで。
彼は嗤った。

「い……つの、間に」

「間抜けな問いかけだねえ。それでも我らが王かい？」

うわうざ。

反射的に思ってしまったから慌ててその罵倒が口を突かないように抑え込む。危ない危ない。さすがに初対面でそれはまずい。かもしれない。とりあえず敵じゃないっぽいし。

正確な四角形を赤と黒が刻むチエツクのスカーフが垂れた、上等なシルクハットが、なんとなく胡散臭いマジシャンみたいだった。光の加減でか淡い銀の髪が時折紫に煌めく。

なんてことだ。

どうやらこの世界は美形ばっからしい。美女(?)、美少年、美少女、また方向性の違う美女、??で、この美青年。む、むかつく。何であたしは外見ソフト Cheney じゃないんだ。RPGならやるだろ！ これじゃ居たたまれないっいたらないんだけど！

内心ギリギリと妬みまくっていることを隠す??気はないけど一応悟られないように雑念を払い、あたしは眉を寄せて男を睨んだ。隣でルツチエが吃驚したような顔で口許に手を当てている。……え、ちよつと待つてその悪漢放置のまま大丈夫なの?!

そんなあたしの危惧に気付いたのか、すいと長い指をが目前で伸びた。爪が獣っぽい。

(??？獣っぽい?)

何で、あたし、今そんなこと思ったんだ。

「ご覧ください。これでこの下郎はもう動けぬでしょう」

はつと男の指に示された先を見る。??ぽかんとした。

両手を後ろに一括りにされているのは、まあ、普通だ。縫り合せるみたいに捻られて口に指の先をくわえさせているけどまあそれもおいておこう。だがしかしその括っているのが、ぎらりと尖った刃付きの手錠だった。長く太い銀の鎖がぐるぐると巻き付いている。

さらに言えば足も同じ様にされ、耳と耳が結ばれていた。え、えぐー。傍^{はた}から見てれば笑えるけど、たぶん痛いんだろうな。つーかよくこれで生きてんな。

ルツチエもぽかんと見つめている。な、なるほど、こんな方法が……とかなんとか呟いてるけどちょっと待ってなんでそこで感心するんだ駄目だろ！ あたしは若干引きつってすすすすと仰け反った。

「さて陛下。こやつは私が転移させてもよろしいですかね？ しかるべき罰を与えなくては」

「あ、ちよつと待って。あそこの金髪いるでしょ。あれ王子らしいん、ですけど、一回あの王子の国の王様に、犯人証明しなきゃいけないんです」

うつかりぎつくばらんに話しかけて、あたしは途中になってから危うく敬語に直した。ずつと敵意剥き出しな奴らばかりと対してたから、ついぞんざいになってしまつ。こりやまずい。

片眼鏡^{モノクル}の青年は眉を跳ね上げた。あたしは瞬いた。多分はじめて、彼は皮肉気な笑み以外の顔になった。

「それは人間の王に捧げると?」

「え……別に、そういうことじゃないけど。そう、喧嘩売っちゃったから」

「喧嘩?」

「真犯人、見つけるって。襲ってるのはあたしじゃないって、証明する為に」

殺してなんかいない。

そう、半分意地みたいに。でも、多分、もう半分は、殺されたくなかったからだ。だから、こんな、今考えてみれば無茶な約束をした。だってもしかしたらあの魔物はもう居なかったかもしれない。見つからなかったかもしれない。飽きて、暫くねぐらに帰っていたかもしれない。そしたらあたしはただの嘘つきだ。ただ逃げる為にフレデリックを騙くらかした、馬鹿な魔物だ。そうなってた。たえ、事実がそうじゃなくても。

真実なんて歪められて都合が良いものしか受け入れられない。

だから、これはキセキみたいなものだ。

運が悪ければわかりだけど、これだけは“運が良かった”、んだ。

その良かった運を“事実”にするにはこの魔物を連れていかなきゃいけない。真犯人、として。

「……つまり、どういうことですか?」

「そのまんまですけど?」

いまいちついていけない、って感じのそのひとに、あたしは首を傾げる。何が言いたいんだこいつは。というか、最初の質問に答えなくてね?

「……疑われていたんですか? 貴女が?」

「そう言ってるじゃないですか」

なんなんだ。

無言になった男が己の口を覆う。ルツチェがそろそろと彼に近づいた。具合でも悪いのか、と言わんばかりの心配顔。だけどあたしは何故かこの男が次にする行動に予測がついた。

曰く。

「????????ツあつっははは！」

情け容赦なく爆笑、だ。しかも嘲り含み。

あたしはひくっ、と口の端を引きつらせた。ああ、殴りたい。

喉をひくひくいわせて彼は笑い続ける。その高らかな笑い声に、救急措置をし終ったらしいフレデリックがぎよつと振り向き声を上げた。誰だおまえ、と驚愕の声音にあたしはなんとなく同情する。少年って、きつと一生苦労するんだろうなあ。

ルツチェは伸ばした手を空中においたまま硬直していた。……いやむしる凍り付いている。たぶん、笑い方が危なかったからだと思っ。

「あ、貴女に、そんなちやちな罪を着せて、ひっ捕まえようとしたんですかっ？ ぶ、ふふ、ふはははははははあははは、ば、ば、ば、ば、馬鹿じゃないですか?!」

爆笑する程大ウケなヤツが何言ってやがる。ていうか。

これのどこにウケる場所があったんだっつもの！

5 道化の如く一礼（後書き）

シルクハットとモノクルがとっっても好きです。

6 哀しみには花を

いつまでたつても止まないバカ笑いにあたしの苛々はピークに達した。

「うおい！ いつまで笑ってんのッ？！ うざい！」

石でも投げつけない気分だ。ああムカつく。

なに。なんなんだこの男。ていうか何でこんなに無性にイラツとするんだろう。殴りたい。壮絶に殴りたい。

「あっはははははははははは！」

「うるさいっつってんでしょがー！」

「へ、陛下！」

何だか堪え切れないむかむかにあたしはついつい、男に向かって石を投げつけた。そりやもう力一杯。げいん、と丁度こめかみの辺りにぶつかる。しかしそれでもヤツは笑っている。もーやだ。放っておこう。うん。？？どうして最初っからそうしなかつたんだあたし！

「ああもうつ、そーじゃなくて！ ルツチエ！」

「は、はいっ！」

「ちよっと手伝って」

びくうつ、とルツチエがピンと猫耳を立ててまで姿勢を正す。あたしはくいと顎で崩れた家の方を示した。

きよとん、と丸い目が瞬き、ついで特に考えた素振りもなく、無条件に頷いた。

……それもどうなんだ。

瓦礫を避けて、ばきばきと家だった木片を踏みながら、さっき女の人を置いてきたところまで行く。そつとテーブルクロスをのけて彼女の手首に指二本を当てた。ん、良かった。脈は、ある。どうやら気絶しているだけらしい。……いや、『だけ』っていうのはまた違うかもだけど。

「陛下、その方は……」

「あのバカに襲われてた人。つまり、この家の人だよ。……たぶん」

そういえば、この女の人は赤ちゃんがいるのに、ご主人は居ないんだろうか。たまたま外出しているとか、それか????

(……………そうじゃ、なければ、)

ざつと血の気が引く。どくどくと心臓が嫌な風になり始めた。外出。お願いだ。外出してるだけであつて。

お願い。

と、そんな不吉な想像をしていたら、腕の中の女性が微かに身じろいだ。反射的に、起き上がろうとする。

「……………」

「おや起きたようですね」

「……って何でいんの!」

大丈夫ですか、と声をかけようとした矢先に滑り込んだ声にぎよつとする。いつの間に笑い終わっていつの間にこっちに来ていたんだろう。神出鬼没。

じろ、と睨み上げると、男はおおこわいとまったく恐がってないオーバーリアクションをしてきやがった。

「生きてます?」

「生きてるに決まってるでしょうが!」

今動いたんだから!

「いえそうじゃなくて、お腹の方ですよ」

「え、???あ」

はんつ、そんなことも分からんのか? とでも言いた気な眼差しがうざいこと極まりないのはおいといて。

そうだそうだその通り。母が生きているなら生きてるだろうなんて思っていたけど実のところどうなんだろう。

ぼんやりと眼を開けた女性が、ぼんやりと男を見て、それからその言葉が脳に沁みるまでの数秒ぼうつとしてから、はっと紙のように白くなる。

怪我人とは思えない機敏さで身を起こし、お腹を押さえる。つづ、と冷や汗が流れた。あたしも唾を呑んだ。心臓の音が、耳の横で響いてるみたいだ。

「動い、てる……良かった」

ふつと吐息のような声で、彼女は言った。横からルツチエのほつとしたようなため息が聞こえた。あたしは瞬きして、喉を鳴らして、ようやく肩の力を抜く。

良かった。

とても、痛切な、言葉だ。

「??さて、じゃあもう良いですか？ 行きますよ、陛下」

「だーもう空気読め！ ていうかまだです！ まだぜんぜん良くないです！」

「のんびりな王ですねえ」

??こんのえーけーわい！ “ 敢えて空気読まない” ！

胡散臭い笑顔でぐいぐいと肩を引つ張って来る男の手を振り払う。くわー、こいつ絶対話聞かないタイプ。

おろおろするルツチエの髪の毛をさりげなく梳く手が変態臭い。??つーか何やってんのコイツ！

「ばっ、ルツチエに痴漢行為働くな！ 害虫！」

「酷い言い様ですねえ。私は美しいものを愛でているだけですよ」

「ああああそいう背筋がぞわつとすること言わないで！ 石投げたくなる！」

「もうすでに先程投げられましたよ」

ぎゃんぎゃん言ってしまったから、女の人が苦しそうな顔をしたのを見て、慌てて口を噤む。おっととと。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ……あの、あなた達、は………」

戸惑い混じりの語調がだんだん低迷していく。視線の先は、ルツ

チエの猫耳。やべ、と思つた時には彼女は眼を剥いて叫びそうになつていた。うわっちゃしまった！

「あーわーわーっ、おお落ち着いてください！ テキはやっつけましたから！ この子はただの可愛い猫耳さんです！ えええええとだからー」

「……言語能力を疑いますねえ。失礼、ご夫人。我々は貴女に害意などございません。ご安心召されよ」

何さりげなく失敬なこと言いやがってんだらうこの野郎は。

だけどヤツ曰く“ご夫人”はそれで落ち着いたようだから、まあ、良いつてことにしておく。ルツチエが肩身狭そうに縮こまってしまつたので、あたしは苦笑して、大丈夫、と口だけ動かした。

「あの、ところでご主人さんは……」

「あ……今、街に行っていて……」

よおつつつっしや！ セーフツ！

ぐっ、と心の中でガツポーズになる。心の中で。

あたしがあからさまにほっとした顔になつたせいか、彼女はちょっと不思議そうになつたけど、すぐに儂く笑つた。

「もうすぐ、出産なので……子供に誕生祝いを買つて来る、なんて、気の早いことを、言つて……」

「……………」

ずうん、と奥さんの周辺の空気が重くなる。

さつきから煩い男もさすがに何も言わない。ルツチエなんかこうべを垂れて落ち込んでいる。うわあ。どうしよう。

かく言うあたしも焦つた。ひっじょうに焦つていた。

(ど、どど、どうしよう。そりゃー落ち込むよね、せつかく喜ばしいことが近かったっていうのに、めっちゃくちゃ平和で平穩に過ごしてたのに、こんな)

ああ、もう、情けない。なんて言葉をかければいいのか分からなくなる。こういう時、蓮だったらきつと上手いこと言ってくれるんだろうに。なんて、友人の顔が浮かぶ。秘めやかな声が。瞬間ふと腹の奥底が凍りそうな錯覚が、ちくりと過ったけれど、そんなことはどうでも良かった。ああ。それに。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

だって、こんな状態の、家に。帰ってきた旦那さんはどう思うだろう。身重みおもての奥さんがひとりで、赤ちゃんを守りながら魔物に襲われていたなんて知ったら、どう思うだろう。どんなに、後悔、するんだろう。??あたしだったら、ずっと、罪悪感が消えないくらいに、怖く、なる。めちゃくちゃに自分を詰りなくなる。そんなのは。

そんなのは、酷い。

何か。何か、気が晴れるようなもの。ほんの少しでも、嫌なことが明るい感情に塗り替えられるような。そういう。

(……………はな)

あたしははたと、そんなことを思った。はな。花が、良い。ほとんど見知らぬ、名前も知らないような、ほとんど赤の他人って言うて言い人に贈るには、花が良い。毒草でもない限り、無難で真つ当な代物だ。それでいて、大抵少しは気分が綻ぶ。明るく。

はな。

花を。今、花が咲かないだろうか。あたしは混乱でとうとう頭が沸いたとしか思えないことを考えた。いやむしろあたしの頭にこそ花咲いてんじゃないのっていうような。

だけど、沈黙に次ぐ沈黙に、ぐるぐると脳内で『花』という一文字が巡りまぐる。

はな、はな、はな。花。花よ、咲け。今直ぐ。??たくさん。

睫毛を伏せていた奥さんが、あつと口許を覆う。ごめんなさい、変なことを言つて、なんて苦笑つた。あたしは心底情けなかつた。嫌だ、と駄々っ子みたいに思う。

そんな、笑い方は、嫌だ。だつてせつかく。
せつかく、生きてるんだ。家は大破してしまつたけれど。

「あの、ところであなた方のお名前は……」

奥さんが言いかけた時、ふつと耳の奥から、鼻の先から、ふわりと甘い匂いがした。ピイイ、と鳥の鳴き声が響く。

咲け、とあたしは促されるように囁いた。低く。

??刹那、噎せ返るような甘い匂いが打ち寄せてきた。

ふわ、と視線の真ん前を、薄桃色の花びらが過る。

「え……」

煙が吹き出るみたいに、泡が溢れるみたいに、??そこら中で、花が咲いた。

「……………えええ?!」

焼き爛れた家すら埋め尽くさんばかりの、花だつた。
?????つておかしいだろ!

絶対植物なんて生える筈ない場所からも暖色の花がざつかざつと咲きまくっている。いやいやいやいや、何だそれ。なんか兵の人達もお花まみれでファンシーになってるし。

茫然と口を半開きにしてしまつてから、はっと振り返る。

「ちよ、な??何これ?!」

「何、つて貴女がやつたんでしょように。それこそ何言ってるんですか」

「え、おまえじゃないの?!」

「何で私がそんなことしなきゃいけないんですかまったく。陛下はおばかさんですねえ」

「またさりげなく失礼なこと言うな! じゃなくて、そんなわけ、」
「わああ、すごいです、陛下!」

ルツチエまで!

眼えきらきらさせてそんなこと言わないで!

(何それありえないこれじゃあたしどんどん人外になってってるじゃん!)

ひくひくと頬を引きつらせても、わしゃわしゃと足首を草がくすぐる。い、家の中まで侵食してるし!

「……………ふ、」

あたしはぼけらつと停止した。

小さな笑い声が聞こえたからだ。可笑しそうな、女性の。

「ふ、ふふ。すごいわ、奇跡みたい。こんな、術があるのね…………お嬢さんは、神官の方なのかしら。こんなすごい術を使うんだもの。

……………うふふ、ありがとう」

「あ……………」

きつと、奥さんは誤解しているんだろう。あたしはこの世界の、ましてやこの国の人じゃないから、前にフレデリックが言っていたナント力術なんて使えない。まあそんなこと言ったら魔王だって言われて本当に魔法使えることだっておかしいんだけど。

でも、きつと、奥さんは喜んでくれた。たぶん。

家がこんなお花畑になっちゃったのに、ありがとうなんて言ってくれる。

ああ、もう。

大人つてすごいなあ。

多分ものすごく見当違いなことを、だけど心の底から思ってしまった。つて。

あたしは困ったように微笑った。

炎なんか出せなくなっちゃっていいけど。

花咲かじいさんには、そういえば昔憧れてた気がする、なんてことをふと思いついた。

6 哀しみには花を（後書き）

花咲か魔王、の回。

砂花の趣味は渋いです。

「はじめまして、こんにちは」

……なんて暢気に笑ってる場合じゃない。

「……………おい、何だこれ」

呆然とした声にはっと振り返ると、呆れを通り越してげっそりしているフレデリックがあたし達の方を見ていた。ベルヴェエラさんはひらひら舞う花に構われて、なんか違う意味で大変そうだった。…何だろっ、花にも好みがあるってことか？

(それにしても、なんてーか……………)

花、似合うなあこの人達。

きらきらしい金髪が揺れて、名前も分からない桃色の花びらが舞う。赤みの強い銀の眸が陽の光で透き通る。祝福するみたいな咲き方で、茎は伸びて葉が開く。真っ白な蕾が上向いてフレデリックを見ている。対して黒い髪に上り詰めるような真紅の花びらがベルヴェエラさんにまといっている。風のせいかな、それともやっぱり好みなのか。ちよつと変わった衣装も相まって実にお見事。

うん。まさに天使と女神。教会とかに目一杯飾られてるみたいなヤツだ。なんだっけあれ、天使画だっけ？ くわー、ほんつと羨む気も失せる美形っぷりだなー。それとも異世界人フィルターってだけで、本当は結構普通の顔なんかな。あの頬にぐるぐる模様落書きしてやりたい。

「……………おい、」

「おおっと！ しまったうっかり見蕩れちゃったよ。あ、うん、何々？」

「……これは、なんだと、訊いている」

「青筋立てんなよ短気だなー。大丈夫大丈夫、ちょっと、ねえ、咲いちゃったただけだから！」

意味分かんねえよ説明しろこのすつとこどつこい、という眼差しで睨まれた。や、多分もつと上品な言い方だとは思っけど。

害はない、害はないのさー、と適当に手を振ると、フレデリックは俗世に飽いたお坊さんみたいな顔になって、もういい、とか何とか呟いた。黄昏れてる。いいじゃん毒花とかじゃないんだからさ！
綺麗だし！

「……ふうん、面白いですねえ」

顎に手を当てて、言葉通りの顔をする男に今更気付いたのか、フレデリックは眉間に皺を寄せた。空気が張りつめて、無駄に胃が痛くなるような緊張感が浮かぶ。あーもうやになるなあ。

と、フレデリックの視線がルツチェに移る。色のない眼。ルツチェは一瞬だけ身を固くして、だけどすぐ、瞼を下ろした。間近で、彼女の肩の力が抜けるのが分かる。あたしはぼんやりと二人を見て、ただどあまり隔意がないのを少しだけ不思議に思った。

ルツチェの白い手があたしの前に差し出される。瞬きをして意を窺えば、彼女は柔く微笑んで、多分手を取るように促してきた。ちよつと躊躇したけど、結局ごく当たり前のようにあたしの日本人的な手を重ねる。ルツチェは嬉しそうに眼を細めた。……合っていたらしい。良かった。

「そこな人の王の子よ」

男の言葉にフレデリックが体勢を低くする。そういえば、この変な男の名前を訊いてなかった。あんまり挑発すんなよ、と眼だけで

訴える。……無視られた。ちつ。

「この不届きものは我が一族が処分する。だが我が君の疑いを解くに、おまえにこの者の腕をやるう。それでよいかな」

……うで？

いや。いやいやいや。それってぶった切るってこと?! 怖ッ!
(しかもそれってほんとんどこっちが持って帰るってことじゃん!)
腕一本って!

フレデリックもそう感じたのか、明らかに不満そうだ。というか、そんなことで証明出来るか、とか言いたいんだろう。分かる。超分かる。ベルヴェエラさんは負傷兵の最後の一人に応急手当てをしながら射殺さんばかりの眼差しであたし達を見てきた。ひー。

フレデリックは何か考えるような様子で、剣を下げている腰帯に手をやった。待て、早まるな。ぎよっとしたけどフレデリックは慎重に続けるだけだった。

「……それでは納得くださらない」

王が、ってことだろう。多分。最もな言い分に、男は蔑むような顔でちつ、と舌打ちした。……おい。

「致し方ない。ならば眼玉でどうだ」

「……それこそ分からん」

なんでいちいちパーツなの?! 怖いって!

「ならば何が良いと言う」

「……せめて、首を」

武将かよ！

そういえば歴史やら古文やらじゃ、大抵首打ち取ったり！て
のか、切腹が多かったなあ。時代劇もただけ。でも首つてそらまた
なんというか、現実でそれ一個にするとすごい怖い気がするんだ
けど。どうよ。

(……まあ、こっちは常識が違うもんだろっからなあ。中世のヨ
ーロッパ戦争時代って感じかなー)

ねえルツチエ、と呼びかける。ルツチエはきよとんとした。次い
で首を傾げる。……まったく動じていないっばい。あたしは軽くル
ツチエを尊敬した。

「首は我らが持っていく。眼も腕も嫌なら軀でどうだ」

フレデリックは渋面を作り、暫く考え込んでから、折れた。

「……解った。それで応じよう。だが、眼玉もひとつ、おいていけ」
「よかるっ」

頷き、男はくいつと人差し指を動かした。ひゅ、と耳許を風が通
り抜ける。見上げると、ふわりと“不届きもの”が飛んできた、と
ころだった。げー。

さすがにフレデリックもぎょっとしている。何か反論しようとし
ていたらしいベルヴェエラさんもぽかんとしていた。分かる。すつご
い分かるよ！ うんうん同意するあたしの横で、ルツチエだけは尊
敬の眼差しを向けていた。もちろんあの男に。何でだ。

そんな外野をまるで気にせず、男は勢いよく指先で空を切った。

瞬間複雑に縛り付けられていた魔物の首が飛んだ。男が掴み取る仕草をする。その動きの通り、綺麗な裂け目の頭が男の腕に収まった。

そうしてすると右の眼玉を抉り取る。

「そら眼玉だ。その軀は好きに持っていくがいい」

放り投げられた眼玉を慌ててベルヴェラさんがキャッチする。ハシカチっぽい布で。フレデリックも取るうとしていたらしく、突き出した手がちよつと物悲しい。ごほん、と咳払いしてあたし達を睨む。

「わかった。だが、おまえ達は魔物だろう。?? 捕らえねばならんのだが」

……今更？

呆れたようなため息がすぐ近くから届いた。ルツチエだった。見ると、しょうがないひとですねえ、と言いた気な、複雑な顔をしていた。その表情に、あんまり憎しみは感じられない。これまた不思議だった。

……この二人は、一体どういう主従関係だったのか。さっぱり掴めない。フレデリックはフレデリックで、奴隷と思っていた筈なのに名前なんかつけてるし。

「捕らえられない程度に強かった、とでも言っておけ。事実でもある。同朋が死に晒すより余程良いだろう」

くすくすと笑って男は良い、ルツチエの方を視線だけで見た。彼女は軽く瞬いて、笑顔で頷く。なんだなんだ。怪訝に首を傾げるあ

たしに構わず、ルツチエはピンと弾くような仕草で中指を突き出した。

ぷるん、と半透明な壁が出来る。あつ、とあたしは眼を見開いた。ナタデココだ！

瞬間的にそう思ってしまったから、いやいや結界結界、と思い直す。あつぶね。

シルクハットを脱いで、男は一礼する。奇術師マジシャンみたいに、にやり、と底意地の悪い笑みが閃いた。

「それでは御機嫌よう」

ぐっ??とルツチエがあたしの手を握る力を強くする。引つ張られるような感覚に、え、と眩きをもらった次の瞬間、爪先が地を離れた。ほんの数ミリ浮かびあがる。え、何これ。浮いてる！ 浮いてるんだけど?! 魔法少女かよ！ そんなことを思っている間にも高度は上がる。どんどん。泳ぐみたいに空へ近くなっていく。

混乱の前に驚愕で思考停止した。ありえない。

だけど、ふと、あたしは何でか振り向いた。

あたし以上に驚いている、赤みの強い銀の眸と眼が合った。

何か、口が動いている。でも聞こえない。あたしは苛立ちに眉を寄せ、ふとあることに気付いた。

ぎゅ、とルツチエの手を握り返す。躊躇いは一瞬。

(もしかしたら、向こうも聞こえないかもしれない。でも、) 眩く。

「あたしの名前は一之瀬砂花。覚えておいて、フレデリック」

瞠目をする少年に挑戦的に笑んでみせて、あたしはくるりと背を

返した。

それで一気に、距離は離れる。

*

水鏡を見ていた彼女は、呻くように額を覆った。

「ああ……」

同朋のとんでもない行動の数々に肩を落とす。洒落た片眼鏡モノクルを媒介に映し出された光景は、ただでさえ心労でキリキリしている彼女の胃を抉るに充分だった。

これは、と彼女は思う。

これは、帰ってきたらちゃんと行ってきかせねば。

すいと水鏡の上に手の平を滑らせて、彼女は深い深いため息をついた。

8 読んだ字の如く逃飛行

絶叫系と空中浮遊は違うと思う。

主に、恐怖の割合とか。

「うああああああっ?!」

飛んでる。飛んでる。飛んでるッ!

えええええ、何これどうなってんのていうか何であたしは今生きてるんだろっ切実に不思議! ぶわぶわと押し寄せてくる風圧でめくれあがる髪の毛にべしべしと打たれながら、あたしはだらだらと冷や汗を流した。ぎゅううう、とルツチエの手を握りしめる。無理。怖い。ありえない!

とか叫びたいのに声も出ず、拳匂に片眼鏡の男に引き寄せられた。きらりとレンズが輝く。

「陛下、そうら人の国ですよ!」

「っておいしいいいい! 引っ張るなやめろそしてアツサリ手え離さないでルツチエ!」

って言ってるのにルツチエはにこにこしたまま離れてしまった。

やべえ落ちる! と泣きそうになった時、空中なのが嘘みたいな軽やかさでふわりと男の腕に引き上げられる。ぬおわ。鷹匠かおまえは。

「わたわたししないで下を見てください。何とも色鮮やかな世界でしょう」

「いや! いやいやいや! 無理! 下見るとか無理ッ!」

「見るんです。??異世界から来た、我らが唯一の人」

ノット・セル・メイト

????ひやりとした。

振り返る。片眼鏡の向こうの瞳が冷たくあたしを見下ろしている。皮肉な口調とは正反対に、陰惨で、たとえば今あたしが言葉を間違えたら、この上空何メートルかのところから突き落とすような眼差し。見る、とその目が言う。

あたしの世界じゃないこの場所を。

見ろと冷たく、命令する。

その視線で、幾分冷静になった部分が、揺らめいた。火のようにごう、と。

おまえは、誰に、命令しているの。

頭の芯がじんわりと唸った。ひりつく視界が熱い。眉をひそめ、傲然と口を開きかけ、けれどもあたしは何も言わず、男が言う通りに下界を見やった。

緑。

最初に思った感想はそれだった。

見渡すほとんどが森に覆われている。揺れる常緑樹。季節がよく分からないからもしかしたら違うかもしれない。だけど埋め尽くさなばかりの木々が広がり滑らかな円を描く山脈が折り重なっていた。きれい、というより猛々しい。侵略を許さない、複雑な緑。その緑の外側に広がる青がある。白波が緩やかな線になって透明に跳ねる。光が反射して、目も眩むくらい綺麗な青い海だった。

それからぼつぼつと浮かぶ白い町並み。人が??魔物じゃなくて、人間だけが、暮らしているところ、だ。多分。それが、山境や川を挟み、飴細工みたいにまばらと色が散らばっている。文化が築かれている証なんだろう。遠目でも、賑やかしく人々が行き交う様子が窺えた。

「お分かりでしょうが、あれが人間達の領域です。いやあ、羨ましいくらい幅広いですねえ」

「……………」

くすくすと笑いながらの男の言葉に、ルツチエがほんの少し複雑そうな顔をした。痛いような、思い出すのも忌まわしいような、けれども諦めるものを見るような。……ため息みたいな、顔。

ルツチエ、と呼びかけかけたあたしは、ぐいと顎ごと引っ張られてその機会を失った。

「いつ??？」

「さてそんなものはともかく。あちらをご覧ください」

人の顎を引っ張って返す指でいっとう山深い一角が示される。むかむかしながらもあたしは見た。きゅ、と眉を寄せて目をこらす。妙に大きな葉を持つ木々が、見えた。こんな遙か上空からでも分かる大きさだ。

(……………違、う。あたしの目が、おかしい?)

は、と気付いたことに戦慄する。なんだろう、これは。ものすごく嫌なフラグだ。一瞬、遠い誰かの名を呼びそうになった。

でも、多分それは今考えても仕方ないことだ。だからあたしは考えないことにして、ぱちぱちと瞬きする。

風が吹いた。

木々に包まれた中に、灰色の何かが見える。ところどころ薄まっ
て白にも見える、あれは?????石?

「……………石の、町…………?」

「そう。あれが、我らが故郷。私^{わたくし}どもの住まう場所。小さく弱い生き物がひっそりと息をする為の町。その一角」

うたうように、彼は吐き捨てた。
あたしはぼんやりとその町を見つめる。
男は言う。

「?????我ら魔族の隠れ里です」

*

空に消えた魔物達の姿を諦め切れずに、彼は瞬きもせず目に痛いほどの蒼穹を睨んでいた。

甘い匂いが鼻孔をくすぐる。あの少女の姿をした魔物が残っていた、魔の産物。……まるで、尊き方創造主の力のようで。

あれは魔物だ。だから、たとえ彼らにどれほど悪意がなかるうと、結局は敵になるのだろう。人間という生き物はそもそも同種でさえ殺しあうのだ。???いや、違う。それではまるで、人間こそが悪のようではないか。けれどもそうでも思わなくばやっていられなかった。

何故、あんな顔で笑うのだ。
勁い、火のような眼で。

「……殿下」

「………逃げがしたな。仕方ない。帰るぞ、ベルヴェエラ。一家族救えただけでも儲け物だ」

救ったのは、自分達ではなくあの魔物達のようなだったが。

ぞくぞくと身体を起こし始めた兵達がよろめきながら歩き出す。驚いたことに死人は居ないようだった。ただ重傷者が三人ほどいて、それが彼の気を焦らせる。一刻も早く戻り治療を受けさせなければ、肩から流れて足許にまわりつく袖なし外套マントの裾を払い、彼はくると踵を返した。被害に遭った一家にも幸いなことに死者はない。補償を出すのはせめてもの責任だろう。……あと、一步。あの魔物が間に合わなければ、女は死んでいたかもしれない。彼女は間違っていないかった。間違っていたのは彼の方だ。

そう、彼が、間違えたのだ。はじめに。

面倒がってはやまらなければこの家も今は無事に済んでいたかもしれないというのに。

(………愚かだな)

暗澹たる思いで自嘲する。顔には出さないが。

浅くため息を吐くと、フレデリックは悔し気なベルヴェエラを促して馬車の中に戻った。

一人分広くなった中で小さく名を呼ぶ。

「………サハナ」

答える。

魔物とは、何だ。

てつきりその隠れ里に行くのかと思つたら、ついた場所はまるで
ちよい金持ちのプライベートビーチみたいな海辺だった。

「……………わー。波が綺麗だー」

ざざーん、と打ち寄せる波音に眼を細くし、完全に棒読みで呟い
てみる。いやだってコメントし難いんですけど。

やっぱり森に囲まれて、全体的に蒼然たる様子だ。背の高い木々
が作る影は涼しくて、密やかに吹く風が気持ちいい。いいが、しか
し。

……………何で、海？

きゃっきゃと楽し気なお姉さん方も居ない無人島の如く淋しい海
辺で制服姿のまま突っ立ちながらぼけーっとする。ああ、見るから
に阿呆だ。なんかこう青春の勢いそのままバイク飛ばしてきちゃった
んだぜいえーい、みたいな気分になってもものすごくものすごくもの
すごく居たたまれない！ 気まずい！ しかも一緒に来た人がなん
かよく分かんない男だつていう！ なんじゃそりゃ！ ルツチエは
ともかくこれはとつてもよろしくない！

軽く落ち込みながら、ふと空を見上げる。今日は、??この世界
で久しぶりに見た空は、目に痛いほど青かった。蒼穹。雲の色すら

きらきらしている。酷いくらいの青と白。あつちと、どこも変わらないような。このまま、見上げたまま進めば、帰れるような気がするくらい、変わらなくて。

「陛下、大丈夫ですか？」

不意にかけられた声にはっと振り向く。心配そうなルツチェと目が合って、あたしはちよっと苦笑した。だいじょうぶ、と答えて彼女が示す方へ向かう。

「ここはアリユーシラ様の隠れ蓑にしている場所なのだそうです」「アリユーシラ？」

誰それ。

きよとんと首を傾げると、ルツチェは目を丸くしてから、あつと口を押さえた。何そのお茶目な仕草可愛い。

「そういえば、お名前教えていらっしやいませでしたね……。ここまで連れてきてくださったあの方が、アリユーシラ様です。とても高位の魔族で……。羊爺の君とも親しくいらっしやいます」

……よ、よく変わんないけど、あのひとそんなにすごいやつだったんだ？ てか、ヨウヤノキミって何。こつちの名前、なのかこれもよく分かんないけど、固有名詞って難しいな。

「えーと、そのアリユーシラさん？ はどこに」

「お部屋のご用意をなさっておいでです」

「おへや？」

「ええ、陛下が一晩休まれるお部屋ですよ」

……………お部屋！ おお、そのお部屋か！ 拷問部屋じゃなくて！
うわー、嬉しい。嬉し過ぎる。あのいけすかない男もいいことす
るじゃんか。

(……………って、こういう喜び方してる時点で、あたし終ってない？
拷問部屋じゃないとか……………阿呆か)
虚し過ぎた。

「ていうか、お部屋って、野外？」

キャンプみたいな感じかな。それでも身の危険を感じずにゆつ
り出来るなら何でもいいや、っていう気分で聞くと、ルツチエはぶ
んぶんと首を振った。

「とんでもありません！ 陛下をそのような粗野な場所にご案内す
るなんて！」

あれ、そうなんだ。

ちよつと気分が浮上する。本当に言葉通りの“お部屋”みたいだ。
あちらの建物です、とルツチエがツアーコンダクターのお姉さん
みたいにてのひらをすいと動かす。釣られるようにその手の先に視
線がいく。

あたしは固まった。

……………え、お部屋、っていうか、隠れ蓑、っていう、か。

「あの中でお待ちだそうですね！」

??????城じゃん！

8 読んだ字の如く逃飛行（後書き）

タイトルは誤字ではありません。

9 憤怒の肖像

あたしはぼかんと口を半開きにしてその巨大な建造物を見上げた。

どこその湖上ホテルみたいな白亜の城が木々に挟まれて隠れるようにしてひっそりと、だけど堂々と佇んでいる。控えめながらも上品な配色で仕立て上げられ、こぢんまりとしたクリーム色と緑青色のラインが入った尖塔を携えていた。ゴシックというよりロマネスク建築とか、それっぽい感じた。ともかく壮観。

……みたいなでかい城を隠れ蓑とかいう神経が庶民派日本人のあたしにはさっぱり理解出来ないんだけどそれはあたしがおかしいんだろーか。

ぎい、と重々しい音を立てて柵門が上がリ、玄関口なんだろう門扉が内向きに開く。え、あの、本当に入っているの？ ねえちよっとルツチエそんなるんで先行かないで！

「アリューシラ様！ お連れ致しましてございます」

大ホールの中央でルツチエが声を張り上げた。これだけ豪華なりゾート地。天上に天使かマリア様みたいな絵を期待したところ、あっさり打ち砕かれた。変わりにあったのはおどろおどろしいかにも暗黒なフレスコ画だった。なんてこった。てか、フレスコ画ってこんなグログロな絵、描けるもんなんだ……。

そんなことを思っている間に螺旋階段からとん、と黒い影が飛び降りた。ひらりと翻る長衣の裾が巻き上がり、渦巻いてから広がり落ちる。シルクハットの端を掴む指が離れて片眼鏡があらわになった。に、と形の良い唇が三日月に咲く。

「はいはい、ご苦労です。まったく空酔いなんてなっさけない王様

ですわねえ、貴女は」

???ぐぬ。

……思い出させないで良いことを。

かー、と微妙に赤くなつて仰け反る。さつと目を逸らした。くそ、恥だー。ぼうつと海を見ていたのは、気分が良くなるまで浜辺でへばつてたからだ。ああ情けないったらない。これっぱかしは片眼鏡男の言う通りだった。

でも心優しいルツチェはそんなことありません、と庇ってくれた。優しい。

「陛下ははじめてお空にいかれたのですよ！ ちょっと目を回して吐きそうになつてぐったりしてしまっただけではありませんか！」

……ぐさぐさと刺さるフォローをありがとう。でもなんか逆に胸が痛いよ何でだ。

地味に落ち込むあたしに追い打ちをかけるみたいに、アリュースラとやらは続ける。

「というか陛下はご自分で飛べるようにならないといけませんねえ」

「え」

「あと魔法ももうちょっと制御出来ないとワンサカ魔力放出し過ぎです」

「は」

やっべなんだこのザ・少年漫画的武者修行への道フラグは！ 嫌だ！ すごい嫌だ！

「いや、あの、??御免被る!」
「駄目です。はいちよつといらっしやいついでにお部屋も案内致しますからね」

さらりと即答したアリユーシラはくいつと親指で上階を示した。脱兎の如く逃げようとした筈が、妙な引力で引つ張られる。ぐつ、ななな何だこれ! これが最近噂の魔法か! てかなんか首絞まってる気がするの、は気のせい、か気のせい、だ、な、そう、か、気のせい、であり、ますように!

「あんまり抵抗するときゅつといっちゃんいますからね、大人しくなさってくださいよ」

……気のせいじゃなかった!

ルツチエはおろおろとあたしと奴を交互に見たけど、やがてのほほんと微笑んで、

「それでは私はご夕食の支度をして参りますね」

などという嬉しいけど嬉しくないおさんどん的な台詞を吐いて去って行ってしまった。ごき、と首が変な風に曲がる。ほらほら早く行きますよー、と奴が促した。あたしは軽く涙目になる。そんな。

(……………う、)

裏切り者??!

ばたん、と黒字に金のラインが引かれたこの城に不似合い過ぎる悪趣味な扉が閉まった。

えー……と若干引いておそろおそろ内装を見てみると、意外にも中は普通だった。白い清潔そうなシートが敷かれた、木枠の骨組みのベッドが隅に置かれ、真四角の窓が一つある。天井からぶら下がったシャンデリアだけがちょっと派手だ。ふかふかした白い布地の絨毯に足の裏が吸い込まれる。うわ、すごい。なんちゅう高級素材。アリュースラはすつと輿を下ろして、にこやかに口火を切った。

「さて、陛下。よろしいですかね？」

「えーと、何がどうよろしいかと聞かれているのかサッパリなんですけどとりあえず、よろしくないです」

そしてどうしてあたしは今正座してるんでしょう。あんとと膝突き合わせて。

遠い目になる。何だろうこの状況。危機感はないけど、面倒臭感がひしひしと漂ってくる。もう既に足痺れてきたし。

「現状を把握なさっていらっしやいますか、ということですよ」

ゆっくりと、アリュースラは繰り返した。あたしはその言葉の速度と同じくらいにゆっくり瞬く。シルクハットを脱いで脇に置き、彼は少しだけ沈黙した。あたしが、理解するのを待っている。

うん、とあたしは頷いた。目は逸らさず。

「うん。だけど、分からないこともあるよ」

「お答え出来ることならお答えしますよ、我が君」

冗談めかした口調は無視して、あたしはその言葉に甘えることにした。超うぜえとか思っただけ。思っただけよ、うん。

「色々意味分かんないことあるんだけど、まず」

「はい？」

「あたしが魔王って、ほんと？」

アリュースラは一瞬息を止めたようだった。その瞳が翳り冷めそして苛立ちに似た色を浮かべる。憤りのような、昏さ。

……なん、だ？

そんな目をする理由が分からなくて、つと眉をひそめる。この世界であたしに理解出来ないことも分からないことも沢山あるけど、それでも目の前の相手が多分自分に対して苛立っている理由くらい、分かりたかった。

「……無意味な問いかけですね」

「え、」

「あなたが、魔王なのではない。貴女以外に魔王である者がいることがありえない。この世でただひとり、貴女が私達の王だ」

まるで、そうでなかったら良いというような、言い様だ。

まるであたしがアリュースラを傷つけたみたいなのがして、微かに罪悪感が疼く。けどあたしが何か言う前に彼はその不機嫌面を取っ払ってしまった。

「さて、その他は？」

「え、あ、あぁとと……あたし、どうやってこっちに来た、わけ？
誰かが喚んだとか？」

む、と秀麗な眉が寄る。そうですねえと唸ってから、彼はあつさり
りと首を横に振った。

「それ、私達にはさっぱり分からんのですよね」

「……………は？！」

「羊爺の君が、貴女がこちらにやってくるのを察知し、託宣がくだ
ったことで貴女を探しにいかれたのは知ってますが……どうやって、
どうして、貴女が現れたのか。どのような原理であちらとこちらが
繋がったのか。？？どうして、漸く私達が待ちこがれていた王があ
ちらの世界に生まれたのか。それすらも分からないのですよ。困っ
たもんですねえ」

「な、な、ななな、」

「まあ、このような場合においては道理も何も通じない、まさに運
命・偶然なんぞというものが一番当たってるんじゃないですかねえ
あつはつは」

あつはつは、じゃねえええええええ。

がくー、とあたしは絨毯の上に手をついて四つん這いになった。
ぶるぶると腕が震える。そんな、そんな馬鹿な。そんな「なんちゃ
つて、てへ」みたいなノリであたしはこんな死にそうなりアルRP
Gやってんの？！せめて元凶とかいないわけ？！恨む対象もナ
シか！

「はいはい妙なポーズとってないで、びしつとしてください。びし
つとー！」

「……………おまえには優しさが足りない……………」

「欲しいんですか？ 私の？」

はっ、とアリュースラが鼻でせせら笑う。冷やかな声だった。どきりとする。思わず顔を上げると、アリュースラは爪の長い指を伸ばしてあたしの顎を引つ掴んだ。い、たい。

「皆の考えは知りませんので、これは私個人の感情です。????？何故、もっと早くいらしてくださらなかったか」

ぎり、と爪が顎に食い込む。神経がひりつくような痛みが走った。

「貴女がどう思おうと、貴女は私達の王だ。何故。何故、これほど、同朋を傷つけられてから、貴女が現れる。それも異界の人間などと笑い話にもならない始末」

く、と皮肉気に唇が歪むのが見えた。息苦しい。酷い言い草だ、そう思う一方で抗えない慚愧の念が渦巻いてくる。ああ。

吞まれそうだ。この男の、たぶん、怒りに。

「中途半端な希望など、今更あったところで何だと言つのです。あまりにも遅過ぎる。今更。今更、出てきて、」

言葉を噛みちぎるみたいだった。

昏い眼差しで冷たく睨みつけられる。

(???理不尽だ)

だけど、この男にとって、あたしの存在の方が、理不尽なんだ。

「貴女が王だというのなら。貴女が唯一、我ら魔族の救いになる得るというのなら。????その責任を果たしてください。無益に死んでいった私達の家族の命を、よく、その頭に刻み込んで」

その身に我らの寵を受けるといふのなら、その分王たる王であるべきでしょう。

脅し文句みたいな囁きを残してぱつと顎を放される。どすんと尻餅をついたあたしの横をすり抜け、アリュースィラは静かに扉を開けた。

「それではごゆっくり。夜半に呼びに参りますよ。??それまでによくお覚悟なさっていただければ、嬉しゅうございますがね」

あたしはただ呼吸をするのに必死で、何も言えなかった。

あの拷問部屋より余程、怖かった。

がり、と唇を噛み締める。

さっきのアリュースィラの言葉で分かったことがもうひとつある。元の世界への帰り方が分からないこと。??もしくは。

もう、確実に元の世界になんか、戻れないこと。

10 夜と星に埋める声（前書き）

今回は大分シリアスです……。
えと、苦手な方はお気をつけ願います……。！

10 夜と星に埋める声

身体中が苛々するくらいだるかった。

ふかふかした絨毯に膝を埋めて、だらりと腕の力を抜く。は、と浅く息をつけば、気持ち悪くなるくらいの疲労感がやってきた。靴を脱ぎ、セーターをベッドの上に放り投げる。ぼんやりとあたしはさつきまでいた男のことを思い出した。片眼鏡モノクルの向こうで光る嫌悪の眼差し。憎しみにも似た、昏い眼。

『貴女が王だというのなら。貴女が唯一、我ら魔族の救いになる得るといふのなら。???その責任を果たしてください。無益に死んでいった私達の家族の命を、よく、その頭に刻み込んで』

ぎり、と唇を噛み締めて、あたしはふつふつと沸き上がってくるよく分からない感情に顔を歪めた。なんで、と子供みたいに思う。なんで、そんなこと、言われなきゃいけないの。相手がいなくなつた今更、そんなことを思う。狡い、と心の冷静な部分が馬鹿にするように吐き捨てた。

だけど。

ああ、だけど、??だけど!

呼ばれて来てしまったあたしがいけないの。あつちに生まれたあたしがいけないの。??くるのが遅かったあたしが悪いの。

全部あたしが悪いって言うの。

手に出来るもの全てを思いっきり投げつけてやりたかった。この綺麗な部屋をめちゃくちゃに荒らしてしまいたい。苛々する。何だかどうしようもない感情で、頭ががんがんとした。

ふと、ひとつだけある奥の窓を見た。もう随分陽が落ちて、夕暮れも超えて夜の色合いに変わっていた。都会じゃ滅多にお目にかか

れない満天の星が、離れた室内からでも窺える。きらりと白い光が瞬く。閃光は走り、駆け抜け、

落ちた。

ひゅつと喉が鳴った。どうしてか分からない。だけどその流れ星を見た瞬間、矢も楯もたまらなくなって、あたしはドアを蹴破る勢いで部屋から飛び出した。

静まり返った回廊を走り、正面を海側に面した窓を見つけ、あたしは躊躇うことなくそれをこじ開けた。ばん、とちよつとばかり乱暴に。そのまま窓枠に手をかけ、

「……ッ」

半身を蹴り出した。

もとの世界での身体能力を考えると自殺行為としか思えない行動だって言うのに全く問題なく滑らかに身体が窓を潜る。一瞬の浮遊感が僅かな恐怖を与えてくれたけど、重力は過たず急速な落下を促す。どしゃ、と地面に膝から突撃した。かなり痛い。けど思ったよりも綺麗に受け身を取れた。じんじんする足と両腕にぐあああ！と呻いてから、それでもあたしはまた走り出した。

前庭の代わりみたいな木々の間を抜けると砂浜に出る。ざく、ざくと砂に絡めとられてもたつく足を必死に動かした。ざざあん、と波が響く。潮騒が責めるように轟いた。真上を見上げれば月がある。この世界にも月があるんだ。それも、違いの全然分らない、地球の衛星みたいな満月。

ばしゃ、と冷たい感触が足を掬った。

真つ黒の空を見上げて突進したせいで、いつの間にか海にまで入っていた。裸足だから、きんと冷たさがよく沁みる。夜のせいもあって空気すらも冷たかった。冬の入りみたい肌寒さ。

それでも海から出ようとは思わない。

なんで、あたしは、こんなことしてんだろ。ぐらぐらする。気持ち悪い。寒い。だけど水の感触だけが確か。浅瀬からどんどん入っていくもんだから、水かさは増してもう膝下まで来ている。

ああ、でも、眼を逸らせない。

じわりと眼球が痛んだ。きりきりするような痛み。睫毛が入り込んでしまったみたい、な。

「……あ、」

ふと気付いた。この海水はすごく綺麗だ。??違う。

今、目に映る、なんもかんもが綺麗だった。

「……っつ」

くるしい。

身体中が、痛、くて。

喉が引き攣れる。

生暖かい水が流れて口に入り込んだ。塩の味が、する。

堰を切ったように溢れ出した涙がうざったくて、あたしはぐしゃぐしゃの顔で空を見る。

満天の星。月光。水の冷たさ。これのどこが異世界だって言うんだらう。

だって、こんなにも、似て、いる、のに。

「……………あ、あああ……………」

ばしゃばしゃと海水が激しく跳ねて絡み付いた。けれどそれはすぐにほどける。全然粘りのない、さらさらした水。

「……………ああ……………」

美しかった。

真つ暗な夜空に皓々と輝く満月。月光がほとばしって、月影が落ちる。水面は揺れる。碧の海。透き通り、貝がきらめく。

眼も眩むほどの星々が、けれどしだいにぼやけてくる。

「……………ああああああああ……！」

まるで当然のように美しいこの世界は、ただどあたしの世界じゃない。

コトコトと煮込んだ鍋の中身をすくい、小さな皿に入れる。とりと赤い汁を一口含んだ。仄かな辛みがレドの実の甘さを引き立てる。うん、美味しい。ルツチエは久しぶりに作った料理にほっと胸を撫で下ろして、ピツと指を払った。しゅん、と蒸気の抜ける音とともに鍋の下の火が消える。ほうと息をついて、ルツチエは耳をぴよこりと動かしつつ、他の品の塩梅を見る。

「……全部、大丈夫ね」

陛下のお口に合うと良いのだけど、とどきどきしながら厨房から抜け、アリューシラ達を呼びに行く。ほてほてと歩きながら、ふともう会うこともないだろう人間の王子のことを思った。

疲弊し、もう死んだ方がましだと、そんな気分だった時に、名前を貰った。

憎かった。

恐ろしかった。

殺してやりたくて堪らなかった。

別段彼が何かしたわけではない。けれども彼はルツチエの同朋を狩り、彼ら人間は彼女の同朋を殺し回った。それは人間側にだけ言えることではないが、それでも憎いと思ってしまふものだ。奴隷として使われる間に、随分と感情は麻痺していたけれど。

だからだろうか。

回復して、もしかしたら逃げ出せたかもしれないのに、自分はまだ無気力で。魔族であることも、培ってきた誇りも、忘れはしなかつたけれど。??逃げ出して、何になる、と。諦めていたのは、きっと、本当のことだ。王の魔力に当てられて、力が強くなったこと

もある。けれどもきつと自分はもつと死ぬ気で頑張れば、もつと早くあの拘束から逃れられていたかもしれない。それなのに自分は唯々諾々と過ごしてきた。羊爺の君が戦っている間も。

墮落だ。馬鹿みたいなのに、恨むだけで、諦めて。生まれたての赤子のように魔力がないほどの弱者ではなかったのに。

心中で打ちのめされるように慚愧の念を抱え、ルツチエは小さく息を吐いた。

あの、王子。

当然のように魔族を奴隷にして、疑問も抱いていなかった。けど妙なところで彼女達に公平でもあった。他の人間のように魔族を虐げるでもなかった。それが、どうしようもなく複雑で、憎いのに、憎み切れなかった。

奇妙な人間だった、と思う。あの時、どういう風に見れば良いのか、ルツチエには分からなかった。

(でも、きつと、もう会わないもの)

だから考えても仕方がない、と彼女はこの城の主の部屋を控えめに叩いた。ふわりと内側に扉が開き、奥から「はいはい夕食かい？」という声が届く。ルツチエは微笑んで首肯した。

「はい。メルヴィルの肉とレドの実のスープをお作りしたのですが、大丈夫でしょうか？」

倒れるように海に転げ入る。ばしゃん、と飛沫があがり、頬に跳ねた。海中で手をつけば、肩の辺りまで水に埋まる。懐かしい名前が舌先で絡げて声に出せない。水は冷たくて、月は青ざめる。

ああ、どんなに、叫んでも。

あたしはもう、帰れない。

だって、どんなにまだ分からないなんて自分に言い聞かせても、あたしの普段は全く機能しないカンが無駄だと嗤う。ぼたぼたと情けなく涙が零れた。びしょ濡れのままぺたりと浅瀬に座り込む。月も、星も、夜闇すらどうでも良さそうに変わらない。つめたい月光だけが嘲笑うみたいにつきまとってくる。

ざん、と波が揺れた。引いては返し、引いては返す。寒い、とあたしは微かに震えた。この海が繋がってあればいいのに。そうしたらあたしは走って帰れるかもしれないのに。埒もないことを考えて、だけど笑う気にもなれなかった。頭がぼうつとする。

たくさん。

たくさん、くだらない約束を、置いてきた。

『苺牛乳とか苺パフェとか、あんたって本当甘いもの好きだよな。あたしは嫌いだけど』

懐かしい声が言う。

『でも、』

懐かしい声が笑う。

『あんなに良いいって言うんなら、一緒に食べに行っても良
いよ』

ごめん、蓮。

約束したのに。

もうあたし、あんなとバイキングになんて行けなくなっちゃった
んだよ。

11 とりあえず、迷子はそろそろ終いにしましよう

ゴミひとつない海は透き通るようで、座り込んだ浅瀬はひどく冷たかった。

服が身体に貼りついて気持ち悪い。どんな世界でも感じるものは一緒なんだなあ、とそんなことを思ってあたしはゆっくり立ち上がった。ひやりと耳の横を風が吹き抜ける。ぶるつと震える。寒い。

(……うん)

でも、あたし、生きてる。

だからもう、行かなくちゃ。

*

「……………あ、あら？ 陛下？」

では陛下をお呼びして参ります、とアリュースラに言いおいて王の部屋を開けたルツチェは、がらんと広がる室内に茫然としてしまった。

……え？

ルツチエは一瞬、お手洗いにでも行ったのだろうかと思った。次に、もしかしたらそれで迷っているのかもしれない、と思った。そういうわけで部屋を後にし、回廊を進み、

停止した。

窓が、開いている。それも全開だ。

（待って。待つよ私。アリユーシラ様がお開けになったのかもしれないわ。そう、きつと、陛下はなれないお屋敷で迷っていらつしやるのよ。ああおいたわしい。早くお探し申し上げなくては？？）

「おや？ 陛下は逃げ出したのかい？」

びし、とルツチエは固まった。

いつの間にか現れたのか、アリユーシラが彼女の真後ろで面白そうに呟いた。微かに含まれた嘲りの色を感じ取って、ルツチエは困惑する。ふよふよと耳を揺らす。

「そ、そんなことあるわけないではございませんか！」

「そうかな？ もとより別世界で生きていらしたお方。逃げ出したくなってもおかしくはないでしょう」

「そんな……、アリユーシラ様は、陛下がお嫌いなのですか？」

つい、不敬にもそのような言葉が零れ落ちた。ハツと口を押さえるルツチエに彼は目を丸くして、それから婉然と微笑んだ。

「ああ。嫌いだね」

ばたん、と玄関扉が開いて閉じる音がしたのは、ルツチエが息を呑んで、何かを言おうとし、けれど言えずにただ喘いだその時だった。

慌てて階下に降りると小さな人影があった。ぱたぱたと彼女に駆け寄るルツチエの後をアリュースラが追う。ルツチエは声を張り上げた。

「陛下?! 一体いかがなされたんです?!」

ゆっくりと、黒い髪に覆われた面が上がる。黒曜の瞳。見慣れぬ衣服。細い腕。

その全てがびしょ濡れだった。

驚倒するルツチエに代わり、眉をひそめたアリュースラが、何か拭くものでも持ってきて差し上げなさい、と彼女に命じた。あわわと厨房の方からなるべく清潔な布を持ってくる。ばさつと被せるようにして王の頭を拭くと、ふと目が合った。王は柔らかく微笑んだ。ルツチエはその表情に、一瞬、ぴたりと止まってしまった。

(……陛下、下?)

「ん、ごめんごめん。ありがとね、ルツチエ」

「え、いえ、そんな！ それより何があったのです？ こんなに濡れて……」

「んー、ちよつと海に入っちゃって」

「ええ?!」

海?! この寒い中、海?!

ますますわけが分からなくなる彼女に、ちよつと申し訳なさそうに王は首を傾けた。

「ね、迷惑かけちゃって悪いんだけどさ、乾かす魔法とか、ない？ 炎とかでも良いんだけど。ちよつとタオルじゃ無理なくらい濡れてるから」

あ。

言われて、ルツチエは漸く気付いた。そういえば、そうだ。ルツチエは炎は扱えないけれど、確かアリュースィラは出来たはずだった。振り仰ぐと、彼もしまった、という顔をしていた。少なからず動揺していたらしい。

「……まったく、手のかかる陛下でございますねえ。はいはいちよつとこつち来てください」

ひよいひよいと手招きし、寄っていった王に彼は平手をかざした。瞬間ふわりと炎が広がり彼女の周囲を覆う。嫌そうな顔をした王だが、濡れた身体は瞬く間に乾いていった。慥然とした表情をした彼女が、それでも「どーも」と礼を告げる。それで？ とアリュースィラが皮肉っぽく口角を引き上げると、王は静かに彼を見上げた。うん、と頷く。

「修行でも何でもやってあげよ。覚悟はなくても、もう帰れないんだって理解はしたから」

乾いた服を確かめながら、彼女は気のない様子で、けれど確然と言った。

魔法でも、修行でも、何でも。

与えられるなら、押し付けられるなら、何だって貰ってやろう。だってあたしはここで生きていくしかない。いつか帰れるかもしれないなんて甘い希望は捨てて、生きてかなきゃいけない。

あたしは魔王だから。

だから、あたしはたぶん、魔法を知らなきゃいけないし、空も飛べるようにならなきゃいけない。空酔いなんてもつてのほかだ。あたしはあたしが生きてくために、魔王であらなきゃいけないし、あたしの民だとかいう魔物の奴らを出来る限りに守んなきゃいけない。それが義務で、対価だ。あたしがここで生きる対価。あたしがルツエやこの男に助けられたことへの対価。義務は無茶でも果たさなきゃいけない。最低限でも。じゃないとひどいしっぺ返しがあるから。税金を払うのは義務で、脱税は罪だ。たぶん、それと似てる。だからあたしは納得して、噛み砕いて理解して、そうしてきちんと果たさなきゃいけない。この男に突きつけられた言葉を、この

脳みそすつからかなあたしの頭に刻み込んで、そのように立たなきやいけない。

たぶん、そういうことだ。あたしがここで、生き残るっていうのは。

だから、もう、嘆いている暇なんてない。歩かなきゃ。

あたしが泣いたってきつと誰も、あたし自身でさえも困らないけれど。

それでも、生きて、いかなくちや。

値踏みするような視線を向けてくる男に向かって、あたしはうつすらと微笑んだ。背筋を伸ばし、僅かに口角を上げ、気怠気に肩の力を緩めて、偉そうに彼を見る。男の皮肉っぽい眼差しの奥に不可解の色がちろりと過ったのに満足して、返答を待った。しばらくたってから、彼はため息をついて、ごちるように言う。僅かに唇を彩るのは歪な笑み。

「ええ、諒解致しましたよ我が君。マ・マシエステイシエア それではあなたが死にたくなるまで修行をこさえてしんぜましょう」

……………はやまったかもしれない。

*

叱責は、覚悟の上だった。

だが与えられたのは死でも、??罰でさえもなく、かの少女の姿をした魔物を追えという玉命であった。

目を見開く彼に王は凄惨に嗤う。

「出来ぬか、我が息子よ。氷の獅子と畏れられるお前も、斯様な魔物は恐ろしいか」

くつくつとわざとらしい嘲笑は挑発でも何でもなく、王の心のままの言葉だろう。フレデリックはそつと伏せた臉を押し上げた。厭味を言われて顔でもしかめる可愛げなぞもはや欠片もあらぬ。何も感じず、何も考えず。彼はただ、跪いたまま、その勅命を受け入れる。

「?????御意に。」下命、謹んで頂戴致します」

1 女子高生に修行は向きません

どうでも良い話だけ。

あたしっていう人間は、わりかし、結構、かなーり集中力がない。

「つぎ、?????いいいやあああああッ!」

喉元からほとばしった自分のものとは思えない凄まじい悲鳴に耳がびりつびりした。けど、そんなこと気にしてられない。

「はしたない悲鳴ですねえ。はい第二波」

「うええええええええ!」

「うっつ、とぶつかつたら絶対的にまずい有り体に言つと炎でごろんごろん包まれた何やらでつかい岩のようなRPGで超ありがち攻撃が容赦なく飛んでくるのを、あたしは脅威の反射神経で必死に避けた。初めて魔王で良かったと思っちゃったよ!

(無理。無理無理無理無理無理!)

マジ、で、無理!

顔色は多分もう真っ青踏み越えて真っ黒だ。たんツと抉るように地を蹴り空中へ飛び上がる。瞬間四方八方から殺気?????とか思っていたら空気にキュツと締め潰された。

「ぐえっ」

「潰れた猪みたいな声ですねえ」

カエルじゃないのッ?!

てか猪とかいるのかよ! ってちっげーよ何この反則技??!

うっかり三段階で言葉遣いが崩壊した。

ぎりぎりぎり和本気で絞め殺されそうな強さで透明な、ルツチエの『ナタデココ』みたいにぷるつとした帯状のものがぎゅうぎゅうとあたしを捻り上げる。ちょ、無理……マジ死ぬ。

意識が飛びかけたところでぱつと拘束が解かれ、かと思ったらあたしは上空から落下した。地面と激突する寸前で慌てて受け身をとる。

あ、あぶ、危な。

リアルに顔面割れてたぞこれ？ え、なに、こいつ本当に殺そうとしてね？

あっはっはと愉快そうに笑うアリユーシラをちらりと見て、あたしはぞーっと全身冷や汗をかいた。悪魔だ。

「?????なあんか今余計なこと考えませんでしたか？」

「うわあっ?!」

ひーのーたーまーっ！

ピン、とデコピンするみたいな気安さでそんな物騒なものが放たれた。ばっ、と両手を組み合わせ、慣れない力を込める。ええいままよ！ これで燃えたら呪ってやる！

ぼしゅっつ！ というちよつと可愛い効果音であたしのでのひらに触れる寸前、火の玉は掻き消えた。せいぜい、と息を荒くして、とりあえず生存確認。うん、生きてる。生きてる生きてる。……本当か？

疑ってしまったとこで、残念そうな嘆息が聞こえ、もともとそれほど気が長い方じゃないあたしはぶちっときた。

びしい！ と人差し指をシルクハットヤローにつきつける。

「おま、おまえ、あたしをなんだと思ってるわけ！ 泣く子も黙る魔王様だぞ！」

奮然と言ってしまっただけからなんか頭の弱い子の発言ぽい感じがして微妙に落ち込んだ。が、アリユーシラはそんなことを気にしてくれないようなヤサシイ人間じゃない。はっ、と小馬鹿にするように鼻で笑い、偉そうに腕を組んだ。

「だからこの私がわざ、わざ、稽古なんぞつけて差し上げているんでしようが。あんまりおばかな質問はお控えくださいね」

「くあーっ！ むかつくー！」

稽古。

間違っただけ、まあ、間違っただけ、いない。

けど普通稽古って、ウツカリ死にそうになるもんじゃないと思うんだけど。

*

海辺の近くにあるアリユーシラの別荘から少し離れた場所に、崖と森の境目のような場所がある。

なんちゃって魔王のあたしはもうちよっと自分の力をなんとかかんとか便利化するために、このいけ好かないつたらないウザ男に稽古というの名のいじめを受けていた。

「あつはははははは！ まーだ自力で飛べないんですか。もう空怖いとかわないでくださいよ、情けなくて涙出ますんで。よよよ」「うざい！ おまえうざい！」

何がよよよ、だ。勝手に泣いてる！

ぐぬぬぬぬ、と両手を突き出して唸ってみるけど何もならない。正直あたしには空飛ぶ才能がないような気がするのだけでも、この男はまったく諦めないし、ルツチエは笑顔で労いつつ応援してくれるので、結局やめられずにいる。

……ぶつちやけ。

女子高生は電車使うから空なんて飛べなくていいんだ。

とか言いたかったところを我慢してあたしは最近得意になった火の刃を後ろ手に飛ばす。ひゅんと風を切る音とともにアリユーシラの方へ向かったそれは何故か倍になって跳ね返ってきた。ぶわつと背中に迫った熱気に総毛立った瞬間、耳をつんざくような破裂音が響いた。あたしの本能が暴力的に消去したらしい。なんつー安全動物なんだ魔王って。

「うーん、そこで構わず第二波を送るのが立派な魔族ですよ」

「危険本能が悲鳴あげる物騒なもん飛ばしといて何言ってるの……？」

げんなりしつつ振り返り、優雅に紅茶なんぞを嗜んでいるヤツの姿を見つけてあたしはさらにイラツときた。何だその夏のお嬢さんのティーテーブルは。どっから持って来た。

(……あれ?)

今、なんか、違和感が。

なんだろうと首を捻って、アリュースラの言葉だと気がつく。魔物じゃなくて、魔族？ 悪魔的な？ ……まあ、こいつは悪魔だよな。どっちかっていうと。モンスターってより鬼畜。

「陛下、質問なら口でなさい。馬鹿げた憶測を勝手に繰り広げてあとで恥かいても知りませんよ」

……何だってこいついつちいむかつく言い方するかなー。

ともあれ、言ってることは尤もなので、素直に聞いてみることにした。……ん？ 尤も、か？

「あのさ、魔物と魔族ってなに？ 違いあんの？」

獣か人型かの違いとかだろーか。そんなことを考えていると、アリュースラは予想以上に濃い反応を示した。ちよっぴり驚く。何だか憎々し気だったから。

「……えーと？」

「魔物、なんていう生物は存在しませんよ」

「は？」

アリュースラは冷笑した。そして嘲るような声で言う。

「私達は魔族です、我が君。この世のありとあらゆる魔を操り、尊ぶ種族。だから魔族です。魔物というのは人間どもがつけた勝手な、

そして侮辱的な名称に過ぎません」

「ああ……」

あたしはなんとなく納得した。誇りを持って、じゃない。蔑みと恥辱に塗れた呼び名。あたしの気分は少し嫌な方向に冷めて、なんとなく腹立たしいような気持ちになった。けれども同時に民家を襲っていた同族の姿を思い出す。

あれ、は。魔物と言っても良い気がする。少なくとも、あたしはあれをあたしが守るべき民とは思いたくない。……選民主義っぽいかな。

汗で湿った髪に手を当てて、ふうと息を吐く。瞬間軽やかな笑い声が耳の奥をすうつと通り抜けていって、次に目を開けた時にはもう髪は乾いていた。

……魔法、ちよつと庶民的。

「じゃーさ」

「はい？」

「魔物が、つて聞かれても、堂々と違いますつて言えんね」

につ、と得意げに笑ってやると何故か明らかに可哀想なものを見る目で見られた。何それ酷い。

「……馬鹿じゃないですか？ そんなわけないでしょうが。だいたい見つかった時点で捕まりますよ。私達の気配は人間の、感の良い者にはバレてしまいますから」

「あ、なんか、拝神術とか言うやつが使えるひとでしょ？ 魔法かつて聞いたらすつごい否定されたんだけど」

「当たり前ですよ。私達の魔法をあんな紛い物と一緒にしないでください」

こつちもか。

「でもさ、じゃ、魔物はアリュースラと会った時に伸したような、バカのことを言えばいいじゃん。なんかあいつも自分のこと魔物って思ってたっぽいよ」

「……自分のことを？　そう、ですか。つまり里に属していないものですね……ふむ」

お？

ぱちりと瞬いたアリュースラは、ひとり考え中になってしまった。ぶつぶつと何事が呟いている。ぽりぽりと手持ち無沙汰に頬をかいたあたしは、不意に思いついて、にやーっとした。えい、と内心呟く。

刹那、崖下の水が巻き上がり、天高く飛沫を上げて濁流の如くあたし達になだれかかった。ざっぱーん！　と良い音が立つ。ルツチエに教えてもらった結界で自分は守りつつ、あたしは会心の笑みを浮かべた。??名付けて『人工波浪警報』！　注意報でも学校休みにして欲しいんだぜ！　って警報じゃ変か。

にやにやしていると漸く引いた波の向こうから暗ーい笑い声が聞こえてきた。

「……………ふ、ふふふふ。よくもやりましたね……………」

……………ぎらり、とモノクルの向こうの眼球が底光りしたのは、たぶん、気のせいじゃない。

1 女子高生に修行は向きません(後書き)

暢気な新章です。

明るくいけて良かったー、とほっとしつつ、続きます。

2 拾い物にはご注意を

魔物もとい魔族の朝は早い。

日の出とともに襲撃をかけられ、布団……っばい何かを吹っ飛ばして自分は後方に飛び退く。と、何やら美味しそうな匂いの料理が飛んでくる。色んな物が飛び交って目眩がしそうな朝が日常。

飛んできた料理はぼんやりと眺めていちゃいけない。それがパンとか固まったものなら掴み取れば良いけど、スープなんつう汁物だったら自分で皿を形成して余さず受け止めないと食いつばぐれる。朝からとんだ重労働。

「あのさあ……いつも言ってるけど料理飛ばすのやめてよ！」

「はあ？ 何甘ったれたこと言ってますか。毒が入ってないだけでも優しいんですよ」

「普通いれないし！ てかこれ魔法と関係なくない？！」

本日はナントカカニガエルとか言う蛙なのか何なのか正体がいまいち掴めない上に鶏肉としか思えない味の骨つき肉だった。がぶりと噛みちぎり、食べ終わった骨を皿に置いて、あたしは寝不足でくつきりついた隈をぐいぐいと擦った。こつちにきて以来、気が休まる暇がない。てか本当一日くらいゆっくり寝かせて欲しいんですけど。なにこれ。え、あたしって王様だよね？ 魔族なんだよね？ おまえら仲間だろ一時の休眠くらい寄越しやがれ！

とか言う勇氣は微妙にない。本気で殺してきそうて怖い。

何だか朝っぱらから重たい気分になりながら、あたしは軽く腕を振った。歪な半円が一瞬浮かび上がり、消える。ルツチエに教えて

もらった結界の、不良品みたいなもの。なんかあたしってできることほっとんどないよなあ。

飛んでくる凶器を弾いてくれるだけでもよしとしなければいけないだろうけど。

ぼて、ぼて、と落ちるんだかギザギザした半円系の殺傷能力の高そうなそれらをつすら寒い気持ちで眺めて、でもなんかもう文句言う気力が湧かず、あたしはおもむろにそれを拾ってアリュースラの方へ投げつけた。

「ねえ、あつちのさ、大きい森を抜けるとどこに出る？ おまえが言ってた魔族の村？」

「はあ？ 阿呆言わないでください。人間の町ですよ」
「……え」

多分、森の端に位置する海岸側からは、かなり遠い、とは思う。思うけど、そんな近くにこのド派手な城が立つててなんで見つからないんだ。心臓に毛が生えてるとしか思えない。

「うまーく森に溶け込ませているんですよ。だから人間には見えません」

「また魔法？ 万能過ぎない？」

「万能だったら私たちはこんな目に合ってやしませんし、そもそも万能なものなどただの害悪です」

魔族私たちは、そんなものを求めない。冷たい声はそう続けた。

「陛下は感覚で振り回しているようですがね、本来魔法とは魔族なりの論理と、当人の特性によって成し得るものです。夜中は千里を見通しても、光のある場では目も開けられない者もいます。何でもかんでも適当に適当を重ねた度し難い適当さでざっくりやる貴女と

は違つんですよ」

「教えたのおまえだろーが！」

「で、森がどうかしたんですか」

さらりと流された。

あーもういいや。ふかふかした絨毯の上を歩き、アリュースラの横を通り抜ける。微妙に変形したドアノブを回す。

「散歩してくる」

「却下」

スパツと即答された瞬間あたしは脱兎の如く逃げ出した。

結果から言うと、珍しいことに勝利した。

アリュースラの容赦ない猛勢から逃げ切ったあたしは、悠々と湿った森の中を散策していた。ピガアゲヒュルルル、と不穏極まりない謎の鳴き声が聞こえてくるところを無視すれば、わりと気持ちの良い森だ。さわさわと揺れる木々がなんとも瑞々しい。

あふあ、と大欠伸をかまして、瞬きする。眠い。

凝った肩を回し、きよろきよろと辺りを見回す。うーん、とあたしはちよつと唸った。

何だつていきなり森に来たくなつたかと言えば、昨日の夜中あたりに、変な声が聞こえた気がしたからだ。なんかこう、すすり泣きみたいな。

(……なんか不気味だし)

あの片眼鏡男はともかく、ここにはルツチエもいるんだから、一応見に行つて、危なくないか???もしくは人間にこつちを探し当てられていないか、確認しとくことにした。のだ。うん、別に鬱憤溜まつてて良い気晴らしになりそうだからとかそういう理由じゃない。

「んー？」

群生する草をざくざく踏み分け、あたしは耳を澄ませた。

こつち、つまりこのドファンタジーな世界にきてから、どうも耳がよくなった気がする。目もだ。もしかしたら舌もかもしれぬ。五感が変化している。多分。

これは良いことだろうか。それとも悪いことか。

……何だかどンドン、人外になってきてるなあ、あたし。

ちよつと落ち込みそうだったけど、その微細な心情は一切合切考えない。額に手を当て、手近な樹の幹をもう片方の手で押して、そーっと見回してみる。だけでも全く目新しいものは見つからない。つて言つても、この世界のものは大抵あたしにとっては目新しくなるだろうから、目当ての何か、つて方が正確だ。

とかそんなことを考えていた時、視界の端に何か生き物っぽいものが窺えた。お、と思つて近付く。大きさから言つて、中型犬くらいだった。だからまあ、見つかつてやばい類の人間じゃないだろう。……ないといいなあ。

だけど。

「…………ん、あれ？」

その『生き物』の全体像を真正面から見たあたしは、眉をかなり残念な八の字にした。

なんと、推定五歳かそこらの人間のお子様だった。

樹のうろの中に頭を突っ込み、あんまり健康的には思えない寝息を立てて、小さく丸まっている。裸足だ。汚れ切った服は肘のあたりくらいまでのワンピース、みたいなものだと思う。ぎゅうう、とちっちゃい爪が食い込みそうなほど拳を握りしめている。寝ながら臨戦態勢。子供って好戦的。

「……………いやいやいや。そうじゃなくて。何だこの子？」

迷子、ってというのが一番可能性が高い。でも、どうだろう。擦り傷ばかりの身体。ここまで必死に逃げてきたような姿。ひしひしといやーな予感がしてきた。まさか、獣に襲われでもしたんだろうか。それならよく生き延びられたもんだ。

あたしはしゃがんで、木のうろに手を伸ばした。柔らかそうな子供の髪の毛に触れる。それからふっくらした頬に。

うん、体温は、ある。あんまり温かくないところがちょっと心配だけど。

あたしは数秒迷った。子供で、なんかすごい危なそうな状態だった。この子は人間だ。森を抜けた先にあるのは人間の町って言うし、間違いないだろう。もし魔物だったら捕まっているだろうし。連れ帰った瞬間、アリュースラに殺めかけられたら目も当てられない。

でも、こんな小さい子をここに置き去りにしたら、確実に、死んでしまう気が、する。

あたしは眠ったままの子供を拾い上げ、そっと抱っこした。う、結構重い。よろつきながらも城の方へ戻る。

それにしても、本当にこの子は何だかってこんな森にいたんだろう。迷子になるとしても、こんなとこにくる意味が分からない。それも一人で。昨日聞いたすすり泣きのような声は、多分この子のものだ。そりゃー、一人で真夜中にこんな怪し気な森にいれば泣きたくもなるだろう。でも、一晩経つても親の一人も探しにこないなんて、何だか不穏だ。アリュースラは、人にある城を見つけれられないようにしているようだけど、もしかしたら森にも目くらましのような魔法をかけているのかもしれない。

「んしょつ、と」

ずり落ちそうになる子供の身体を抱え直して、あたしは大きな木の根を踏み越えた。蔦が巻いて視界を阻む。ぼうぼうと生えた草はちよつと歩き辛い。なんたってわりあい育った人間ひとりを抱える姿勢なもんだから。

漸く境目が見えてきて、傲然と、まさにアリュースラのようにえらつそうに佇む城が見えてくる。あたしはほつと一息ついて、少し速度を緩めた。てくてくと建物に向かう。

瞬間、何かが肩先を豪速球で飛んでいった。

ぴし、と固まる。え、何今の。そろりそろりと振り向くと、あたしより少し後ろにぶすぶすと電気を纏う大きめの石が転がっていた。

「……………うえええ？」

冷や汗を掻きつつもう一度向いた正面に、恥ずかしそうなルッチエが苦笑しながら立っていた。

「じ、ごめんなさい！ アリユーシラ様に、こうやってお迎えするよう言われたので……………お帰りなさいませ、陛下」

「……………うん、ただいま……………」

……………今の、ルッチエなんだ？
ときどき思っけど、この猫耳さんは結構怖くないでしょーか。

2 拾い物にはご注意ください(後書き)

た、大変間が空いてしまってますみません……！
子供を拾う魔王様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5683/>

魔王の為の夜想曲

2011年9月3日20時30分発行